
電腦の生死

有為

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電腦の生死

【Nコード】

N0548J

【作者名】

有為

【あらすじ】

科学は進歩し、それに伴って倫理観、道德観といったものも変化を余儀なくされてきた。そんな高度に発達した社会では、人々は電腦世界に住むようになりつつあった。

これはそんな電腦世界の一つ、創り上げられた、ファンタジーのような世界での、戦いに満ち溢れた日常。

軽視されがちな、電腦世界での命の価値、質量をもたない電腦世界での、命の重さとはなんだろうか。

プロローグ（前書き）

この作品は暇を見つけてちまちまと書いていく予定です。

本命は永遠の戦いなので、こっちは不定期更新になると思います。
ごめんなさい。

初めて三人称視点に挑戦です。

目指すはカッコいい文章。

ではどうぞ。

プロローグ

高度に発達した文明では、空想の世界が現実となり、夢が現実に反映されるようになる。

しかし同時にそれは様々な弊害を生む。科学の発達と対立する、倫理の問題。生とは何か、人とは何か、人生の意味とは何か、決して証明することのできないそれらの問題は、常に科学と対立し、時には科学を抑え込み、しかし時には倫理観そのものを変えざるを得なくなる時もある。

実体感型オンラインゲームの存在を夢見ていくつも小説が、幾人もの作者によって書かれた時代から、数百年が経過した今日この頃、環境整備と医療技術の進歩により、人々の長寿命化が進み、またひとつの倫理の枠を乗り越えて、文明が進歩した。

最早電脳世界での生活は人々の日常と化し、ヒトの脳を科学で操ることに何のためらいも起こらなくなった。

しかしさらに恐るべきは、倫理観の根本的变化である。増えすぎた人口は、社会のシステムの許容量をはるかに超え、人権の尊重が困難になってしまった。

そこで世界的に始まった苦肉の策、それは所謂「口減らし」である。

もちろん生存権だ、自由権だと騒がれる今日に、生きている人を強制的に殺すわけにはいかない。しかし、食料も足りない、家もない、そういった状態に追い込むことは可能になった。

簡単な話、一部の人々を、電脳世界に住まわせればよいのである。もちろん人々には自己決定権が発生するのだが、なんでもありの電脳世界の住人になることを選ぶ人間は、存外に多い。それも人々の意識の変化の影響だろうか。

電脳世界に住むことを希望した十五歳以上の人間は、その脳のデータを、希望する世界のサーバーにコピーされた後、現実世界の体

を、殺される。

つまり、彼ら電腦世界の人間は、現実では死んでいる。

百年単位で法制度の改革がなされ、日本でもこのようなことが可能になった。これから話すのは、その中の一つのサーバーで起こった、電腦世界に生きる、とある人々の物語である。

一話（前書き）

すみません。題名がなぜかいきなり一話になっていました。
ということでした。

一話

剣が舞い、魔法が輝き、モンスター化け物が光となって消えてゆく。

現実リアルでは有り得ない光景が、この、サーバー「セプタ」では日常的に存在する。そのことに驚く者はいない。

今、モンスターがひしめく薙く森で一心不乱に剣を振るっている少年がいる。ランダムに生成された電腦世界での肉体は、中肉中背、体は年齢に応じて変化するのはこの世界でも同じなので、年は十七歳位だと推測できる。髪は黒だが、瞳は青色。容姿はそれなりに整っているが、電腦世界の中なので、このくらいが一般的であろう。

彼のこの世界での名は、「柳」ヤナギ。リアルでの名字をそのまま使っている。しかし彼は時にこう呼ばれる。「沈黙の柳」と。それは彼のプレイスタイルからつけられたものである。彼、柳は戦闘中、呪文の詠唱以外でほとんど声を発することがない。

普通、力を入れる時など、人は何らかの声を発するものである。それは科学的にも有効とされている行為であり、大抵の人は、意図せずとも声を発して、体に力を入れる。しかし柳は違う。彼はとにかく無口なのだ。実のところ、彼は普段から人よりも圧倒的に口数が少ない。要は会話が苦手なのだ。普段からしゃべらないせいで、戦闘中でさえ声を出すことをためらってしまう。ただそれだけの理由である。

「ふう」

それでも敵を一掃した後には息くらいはつく。戦闘中には息が上がっている状態で呪文の詠唱を行ったりもするため、けっこう疲れるのだ。

このサーバー「セプタ」は、いわばゲームの世界、MMORPGの世界になっている。もちろんログアウトはできないので、ゲームとっていいのかどうかは微妙なところではあるが、内容はゲームそのものであり、モンスターと戦ったりダンジョンを攻略したり生

産をしたりといったことをして、プレイヤーは生活^{住人}している。

ただし普通のゲームとは全く違うところもある。当然、プレイヤーというのは現実世界には生きていないわけだから、有料アイテムなどというものは存在しない。さらに生活というのも全てこの世界でのこととなるので、家を持つプレイヤーも沢山いるし、宿もただのログアウト用のポイントになっているわけじゃない。

そしてここからはこのサーバー独特のシステムなのだが、復活というものがない。つまりこの世界での死亡は、そのままこの世界の追放を意味する。死亡したプレイヤーは、他のサーバーに移動させられてしまうのだ。そして二度と戻ってくることは叶わない。つまりこのサーバーは、電脳世界に身を置きながら、スリルを追い求めた人間が来るところなのだ。

それ故に、そのほかの設定もなかなか厳しいものとなっている。たとえばお金。空腹などもしつかりあるので、何も稼ぎがないと飢え死にしまう。また、さすがに街の中にモンスターが強襲してくることはないが、街を一步出ればそこには多くのモンスターが生息している。街から街に移動するのに、安全な交通機関というのがなかなかないし、あってもけっこうな料金となるので、絶対安全な移動というのはなかなかない。

話を柳に戻そう。

彼は一掃したモンスターのドロップ品を回収すると、太陽の位置を確認した。

「そろそろ昼になるかな」

小さくそう呟き、剣を腰に付けた鞆に納めると、左手首に右手を添えた。すると彼の目の前の空間に、ゲームの世界では普遍的な、半透明のメニュー画面が現れた。そこでマップ情報を確認した柳は、近くの街の方向を調べると、左手を軽く振ってメニュー画面を消し、街に向かって走り出した。

時間を最大限有効活用したい彼は、疲れている体を酷使して、街まで走り続けた。

街に付くと、手近な食堂に入り、その中で美味そうなものを選ぶ。時間はケチるが、基本的にお金はそれほどケチらない。それが柳のスタイルだった。

食事中くらいはゆっくりと食べている。かと思いきや、なんとこの男、食事しながら生産を行っている。テーブルの上に、材料となる鉱物を置き、左手を添えることで生産を行いつつも、右手は箸を持ち、ゆったりと食べていた。

この世界の生産は、材料を用意し、決められた動作——この場合は左手を添える——を行うことによって行われる。さらに生産中は生産のイメージを頭の中で描くことも必要になる。

つまり柳は全く食事に集中していない。食べ物への感謝の念はどこへやら、マナー違反も甚だしい。

彼は手早く食事を済ませると、鉱物の製錬が終わったことを確認して席を立ち、レベル上げをするべく近くの森に向かった。

森についても、柳は足を止めなかった。周りにうるつく敵キャラには目もくれず、柳は森の奥、より強いモンスターのいる場所を目指す。しかも歩きながら、片手で鉱物を握り、生産を続けているのだから大したものである。

森の奥に近づくと、柳の足取りも慎重になってきた。

この辺りでは、モンスターはアクティブ（モンスターから積極的に攻撃してくる）になっているので、迂闊に動こうものなら、様々なモンスターに狙われることになる。

ボスの出現するエリアを避けて、慎重に狩り場を選んでいた柳は、何か凄まじい音がした気がして、耳を澄ませた。

「ザザザ………、ドゴンッ！」

この辺りの普通のモンスターとの戦闘では起こり得ないような、激しい音が聞こえてくる。柳は気になって、慎重に音のする方に歩き出した。

「あれって……」

柳が見た先にあったものは、周りの木々とは一線を画した、圧倒

的な太さを誇る大木、まるで腕のように、二本の太い枝がついた、動く大木であった。

「ボスキャラじゃなかったっけ？」

その通りである。この動く大木こそ、この森のダンジョンのボスキャラ、『フォレストニンフ』である。

「なんでこんなところにいつがいるんだ？」

このフォレストニンフが今現在立っている場所は、柳の記憶にある限り、ボスの出現エリアではなかったはずである。この場合考えられることは、ボスの出現エリアが変わったか、プレイヤーを追って、エリアの外までやってきたかのどちらかである。

柳が観察していると、フォレストニンフに狙われている少女が目に入った。少女の服装は、レンジャーの物、このような森のダンジョンにぴったりの服装で合った。背負った矢筒から、ひっきりなしに矢を番え、大木めがけて打っているが、フォレストニンフの体力はまだまだ残っているようである。対するに、少女は明らかに疲れており、仮にライフが残っていても、体力的に限界が近いようだった。息を乱しながらも、少女は威力の高そうな、太い枝での叩きつけるような攻撃を、紙一重でかわしていく。そして放たれる幾本もの矢。しかしフォレストニンフの頭上に表示されたライフの量を示す棒は、未だ九割を超えて残っている。

「きゃっ！」

とうとう足を縛れさせた少女が、攻撃をかわしきれずに、鞭のようにしなうって襲いかかった枝に弾き飛ばされた。戦闘時の痛覚はある程度軽減されるが、それでも痛いものは痛い。少女は歯を食いしばってフォレストニンフを見上げ、追撃として放たれた短めの枝の投的に気がつき、手に持った弓で弾き飛ばした。弾かれた枝は偶々安全なはずの所で観戦していた柳に向かって飛んできた。

「おっと」

柳はとっさに体を捻ってかわした。そこで少女が柳の存在に気がついた。

「あつ、助けてっ！」

少女は柳に向かって必死で助けを求め、飛んできた枝のパンチに弾き飛ばされた。

面倒が嫌いな柳は、さらさら助けるつもりはなかったのだが、助けを求められたのに見殺しにするのはさすがに気が引けたので、渋々といった感じで、腰に挿した剣を引き抜いた。

弾き飛ばされた少女に追撃しようとしたフォレストニンフに駆け寄った柳は、投げつけようとしていた枝を剣で弾き飛ばし、そのまま連続で攻撃を加えていった。

矢よりははるかに攻撃力の高い柳の斬攻撃が、確実にフォレストニンフのライフを削ってゆく。

しかしボスモンスターというだけあって、一筋縄ではいかない。無数に付いている枝を飛ばしたり投げつけたり叩きつけたりして、柳の方も確実にダメージを受けていく。普通に攻撃し合ったら、ボスモンスター相手に柳のライフがもたない。

しかしそれはあくまで普通の攻撃でやりあった場合の話である。柳は戦い始めてからずっと紡いでいた呪文の、最後の言葉をはつきりと発音し、開いている左手から、フォレストニンフに最も有効系統、つまり炎の系統の魔法を放った。

『ファイアーバリット』と呼ばれるこの呪文は、炎の弾丸を無数に飛ばす、炎系の中位の攻撃呪文である。

さらに柳の攻撃はこれだけでない。腰のポーチに左手を伸ばした柳は、中から黒い球体を取り出して、ロック解除の言葉を小さく呟き、フォレストニンフに向かって思いっきり投げつけた。

黒い球体は、飛翔半ばで破裂し、大量の炎を巻き上げた。『ファイアーボム』と呼ばれる、戦闘用のアイテムである。爆風が収まると、柳は再びフォレストニンフに肉薄し、剣と魔法によって確実にダメージを重ねていく。さらに先程まで戦っていた少女が、時々援護射撃してくれる。アイテムと魔法の惜しみない使用によって、柳は少しずつ、フォレストニンフに対して優位に立ち始めていた。

激しい戦いは、三十分近くも続き、しかし柳はしっかりと優勢をキープし、最後に柳の魔法でフォレストニンフが光のエフェクトを撒き散らして終わった。

「ふう」

柳は短く息をつき、フォレストニンフが消えた跡を見やった。

そこには透明なボックスが、かすかに光を放って落ちていた。これは『アイテムボックス』と呼ばれるもので、中にはアイテムが入っている。この場合は、フォレストニンフのドロップアイテムが入っているはずである。

柳は疲れた体を引きずるようにして、アイテムボックスを拾い、中身を確認した。

ボックスの表面に浮かんだ文字は、『精霊のリング』。柳はこれが何か知らなかったが、とりあえず貰っておくことにした。

柳がメニューを開いてアイテムを格納していると、少女が話しかけてきた。

「あ、あの、さっきはありがとう。おかげで助かりました」

「ん、ああ」

柳井のぶっきらぼうな返事も気にすることなく、少女は尚も話しかける。

「えっと、私は今月香苗いまづきかなえっています。あなたは……？」

「柳」

「下の名前は……？」

「つけてない」

「そ、そうですね、なんか珍しいですね」

この世界に入るときに、名前は自由に設定できるので、様々な名前を付ける人がいるが、名字しか付けない人間というのもまた珍しい。

「柳さんはどのギルドに所属しているんですか？」

「無所属」

「えっ、あんなに強いのに、ソロですか、入ってほしいギルドはい

っぱいあるでしょうに」

「別に、ほとんど勧誘とか受けたことないし」

そうなのである。柳の実力はトップクラスといっても差し支えないのだが、もとよりほとんど人との交流がないうえに、親しみずらい雰囲気を出しているせいで、ほとんど勧誘されたことがないのである。（それでも1・2回は勧誘されたことがあるが……）

「あの、もしよろしければ、私のギルドに入っただけませんか？ 助けてもらっておいて、少し図々しいかもしれませんが……」

「何所のギルド？」

「あ、ギルド『青空』です。聞いたことは、ありますよね……？」

『青空』というギルドは、かなりの大規模なギルドで、ダンジョンの攻略を主にやっているギルドである。大規模なギルドの割にはレベルの抜きん出たプレイヤーは少ないのだが、新ダンジョンを度々発見し、かなりレアなアイテムを蓄えていると言われているギルドである。

柳は少し考えるそぶりを見せた。彼は今までずっとソロで活動してきたのだが、別にギルドが嫌いな訳ではなかった。しかし人付き合いの苦手な彼は、なかなかギルドに入る気になれなかったただけなのだ。しかし、独力では、新たなダンジョンを見つけることは難しい。柳がソロを続ける限り、いつまでも誰かが既に攻略したダンジョンにしか入れない可能性が高い。柳は、未知のダンジョンのより奥を目指すスリルを味わいたいと思ってはいた。その意味では、新ダンジョンの発見に力を入れている『青空』に入るのは、柳にとって悪い話ではなかった。

柳は五分近く考えた。

迷いに迷って、柳が出した結論は、

「いいよ、入れてくれ」

了承だった。

一話（後書き）

とりあえずできているのはここまでです。

どうだったでしょうか……。実は私はあまりオンラインゲームをやったことないんですよ。変な所とかあったら教えてくださるとうれしいです。

二話（前書き）

今回は思ったとおりずっと早く更新できました。

二話

柳にギルド入団を誘った今月香苗という少女は、別に勧誘活動をしているわけではなかったし、さらに言えば勝手に他の人の入団を許可するほどの権限も持ち合わせてはいなかった。

もちろん、香苗からギルドに推薦してくれるのだろうが、それでもすぐに入団というわけにはいかないだろう。

実際その通りだった。香苗がギルドのトップに柳を推薦したところ、柳は入団試験を受けなければならないことになった。試験は、ギルドの人間立ち会いの元での、モンスターとの戦闘。はっきり言って、柳にとっては楽勝も楽勝。なんていったって、試験で相手にするモンスターは、ただのゴブリン。柳のレベルならば、一発攻撃を当てれば倒すことができるだろう。

結局、柳は余裕で試験をパスし、その時の戦闘の手際の良さと、レベルの高さに驚いた試験管が、ギルドのトップに話を伝えるに行ったほどだった。

こうして、柳は晴れて、ギルド『青空』のメンバーになったのだった。

ギルドに入ったことによって、柳の生活はますます忙しくなった。柳の強さに目を付けたギルドマスター（ギルドのトップの人）が、たびたび柳をレベルの高いメンバーと共に、ダンジョンの攻略に向かわせたのだ。そこで柳は遺憾なく力を発揮し、戦いの日々を送った。

しかし柳の人付き合いの悪さは治らなかった。柳とパーティを組んだ人の中には、柳とはもう組みたくないと言った人もいるほど、柳は人と話さなかった。実際、ギルド内で重宝されているものの、柳と仲良くしているのは、香苗ぐらいなものだった（それも香苗が一方的に話しかけているにすぎないが）。

それでも少しづつ柳がギルドになじみつつあったある日、ギルド

の運命を左右する、大きなニュースがもたらされた。

「臨時招集？」

「そう、臨時招集よ。重要度は最大。ギルドマスターが、なるべくすぐに、拠点に来るようになって。柳のそこにはメール来てないの？」

「あ、来てたけど読んでなかった」

肩まで伸ばした黒髪を乱れさせ、かなり必死で走ってきたであろう様子の香苗に言われて、初めてメールの内容を確認した柳は、周りにいた敵を手早く倒して、『青空』の拠点となっている建物へと足を向けた。

時間をケチって走る柳に、息を切らせて香苗がついていく。

「ちよっ、柳速いって。私は走って柳に伝えに来たのに」

ギルドの拠点に着いたころには、香苗は倒れる一歩手前だった。

「同志よ、よくぞ集まってくれた」

ギルドマスターの『小笠原裕』おがさわらゆうという、ひよろりとした、あまり強そうでない細長い感じの青年が、しかしよく通る声で話し始めた。

その横に控えるのは、黒いローブを着て、フードを被り、いかにも黒魔術師といった格好をした、サブマスターの『黒澤和』くろさわやまと。魔法攻撃の威力において、彼の右に出るものはいないと言われている、このギルド屈指の実力者である。因みに彼もまた、柳同様口数が少ないのだが、あまりにも雰囲気マッチしすぎているため、意外と人望がある。

ギルドのメンバーが静かになったところで、裕が話し始める。

「今日、皆に集まってもらったのは、他でもない、新たなダンジョンが発見されたためだ」

ここで、「おお」とか、「待ってました」といった声が上がる。直接ダンジョンの攻略に行かない者でも、ダンジョンの攻略が始まればギルドが潤い、結果彼らにも様々な利益が出るのだ。これを喜ばない者はまずいない。

「しかも、今回発見されたダンジョンは今までは一味も二味も、いや、根本的に違うところがある」

ギルドの面々の興奮は、留まることを知らないかのごとく高まっています。

「故に、今から皆に伝えることは、絶対に口外しないで貰いたい。

このことは、当ギルドの最重要秘密として扱わせて貰う」

最重要秘密。ギルド『青空』では、独自の罰則規定を設けており、ギルドのルールに違反した者は、これに照らし合わせて、罰金や退会処分などの罰則を与えられることになっている。ギルドの最重要秘密を他に漏らすということは、それなりの罰則を受けるということになるのである。しかし今まで、何かが最重要秘密に指定されたことは、一度もなかった。それだけ、今回の発見は凄いものなのだろう。

「今回我々の調査隊が新たに発見した物は……」

ここで裕は、大きく間をとった。

「……未開の島行きの船だ！」

「おおおおおおおおおお！」

ここにきて人々の興奮は最高潮に達した。

未開の島とは、その名の通り、いまだプレイヤーが足を踏み入れていない、或いは踏み入れたものがないても無事生還せず、ほとんど誰にもその存在が知られていない島のことを指す。そういったところには、新たなダンジョンはもちろん、今までになかったアイテムや、モンスターがいる可能性が高い。

しかし未開拓の地には当然、危険も付きまとう。例えばそこに別の社会的動物（プレイヤーでない人（NPC）がいることもある）がいた場合。プレイヤーが足を踏み入れた途端に、その島に先に築かれていた国家との戦争のクエストが発生することだってある。そうした時には、こちらも大人数でもって、そのネイティブ（先住民）と戦い、打ち負かさなくてはならなくなる。

さらに未開の島には、今までに見ない形式の物が数多くある。そ

れは全てがプレイヤーの利になる物ではなく、中には新種のトラップや、モンスターの予想もしない攻撃などが、突然プレイヤーを襲うこともあるのだ。

つまり未開の島へ行くというのは、ハイリスク、ハイリターン。しかし攻略することによって潤う攻略ギルドに、引くという選択肢はない。さらに言えば、他のギルドに知れ渡る前に、未開の島を開拓し、主要なダンジョンを網羅し、アイテムがこちら的大陸で出回る前に、高値で売りたいところなのだ。

「先程私はこれを最重要秘密にする。と言った。しかし情報とはどこからともなく漏れるもの。よって、我々は情報が漏れるよりも早くに未開の島に進出したい。そこで、未開の島への出発は、明日の朝零時、集合場所はこととしたい。それまでは、船の場所は秘密とさせて貰う。船に乗れるのは五百人。参加希望者は今ここで名乗り出てもらう。おそらく我々では五百人に満たないだろうから、不足分は傭兵を雇うことにする。ということ、まずは、ここまでで異論のある者はいるだろうか」

ここまで一気に喋って、裕はギルドのメンバーを見回した。

人々は興奮した様子で、周囲の人と話しているが、異論がある者はいないようだった。質問はあったが。

「マスター、メンバーの基準はどうなんですか。僕のような生産職は参加できますか？」

「未開の島には何があるか分からない。食料の確保が困難になる可能性も否めない。その他生産品を手に入れるのは困難だろうと予測される。よって、攻略に行くメンバーは戦闘職、生産職を問わない。ただし、皆も知っての通り、未開の島は危険が多い。そこで、攻略メンバーの条件として、レベルが十五を超える者とさせて貰おうと思うのだが、どうだろうか」

これにも、特に反対意見は出なかった。ちなみに、柳の現在のレベルは四十ちようど。現在の最高レベルはおよそ五十レベルと言われている。二十五レベルから急にレベル上げが難しくなると言われ

ているこのゲームでは、十五レベルは決して高いレベルではない。そこまでレベルの低い者を連れていってでも、なるべくギルド内の人間で固めたい。というのが裕の方針だった。

「他には？」

「リーダーは行かれるんですか？」

「今回は事の重要性から、出来得る限り最高のメンバーで行きたいと思う。よって私は勿論、和も行くし、主要メンバーは全員行く。他には？」

「参加する場合何持っていけばいいですか？」

「最低でも十日はもつように保存食をもって行ってくれ。他には回復系アイテムや、テントがあつた方がいい。それから日用品は、サバイバルキットシリーズをもって行くことを強くお勧めする。今回の旅はいつ帰れるかわからない。何せ船は一隻しかないし、自動操縦型だから、すぐにこちらに帰れる保証は全くない。だから各自、持てるだけの物を持って行ってほしい。急なことだから万全の準備は難しいかもしれないが、可能な限りの物を用意してほしい。おそらく自分のことは自分でどうにかしなければならなくなると思う。他には？」

その後、三十分ほど質問が続き、最後に参加希望者の確認が行われた。急なことに関わらず、未開の島行きに立候補したのは、三百を超えた。実にギルドのメンバーの七十パーセント、十五レベルを超えている者の、九十パーセントが立候補したのだった。勿論、柳も、香苗も立候補していた。

秘密を守ることを再度確認した後、解散となった。

解散してすぐに、柳はアイテムを揃えにかかった。柳はレベル上げと並行しながら、生産にもかなり力を入れているという離れ業をやっているの、持ち物は少し変わった物となる。柳が得意とする生産は、魔法具生産。生産品に何らかの特殊効果を持たせるもので、生産するときに魔力を消費する。これにより、柳が戦闘中に使っている、様々なアイテムが作れたり、装飾品に対魔法防御の効果を付

加させたりできるのである。

柳は自分の借りている宿に道具を取りに行き、その中でも、最高のアイテムを選びすぎて、自分のアイテム収納用の鞆に詰めていく。その後、ショップに行つて、保存食の大量購入、テントなどの購入を済ませて、ギルドの拠点に戻った。ここならこの遠征のことについて、何かしら有用な情報が得られると思つたのだ。

柳がギルドの拠点の、けっこう豪華な扉を開き、レンガ造りの建物内に入ると、すでに準備を終えたのか、香苗がいた。彼女はどうかやいろいろな人と情報交換をしているらしい。「何持つて行けばいいかなー」といった声が聞こえてきていた。人と話すのが苦手な柳は、今までは基本的に掲示板などで情報収集を行つてきていたのだが、今回はギルド内限定の秘密情報なので、掲示板からでは何も情報を得られなかった。ならばせめて話しやすい香苗から情報を得ようと、香苗たちが話しているところに近づいて行つた。

「あ、柳。どう、準備終わった？」

案の定、香苗が柳に話しかけてきた。

「まあ、大体は」

香苗と話していた二人の女性を猛烈に意識しながら（別にやましい意味ではない）、いつも通り、短く返す。

「私何用意したらいいかわからなくて、瑛理ちゃんえりと綾女ちゃんあやめに相談してたんだ。あ、この人が柳。滅茶苦茶無口で無愛想だけど、根はいい人だよ」

そう言つて、二人に柳を紹介してしまう。

「へー、柳君ね、私は山田瑛理。宜しく」

いかにも真面目そうな、短い槍を背負つた、柳や香苗と同年代と思しき女性が名乗った。

「私は山之内綾女。よろしくー」

対するにこちらは、なんというか、人生気ままに生きてますといった感じの、ラフな格好をした、見たところ魔法使いの、これまた同年代らしき少女が、間延びした声で名乗った。

柳は小さく「宜しく」と答えた。特に女性と話すのは苦手なのだ。
「で、柳は何用意した？というかテントって高くて買えない？」
「簡易式のテントなら、一万円くらいで売ってるし、複数人で大き

めのを買えば、一人当たり七千円くらいでどうにかなるぞ」

「なるほどー、でっかいテントでみんなですてのもいいね、みんな
で一つ買わない？」

「一万円以内なら何とか……」

「いいよー」

香苗の言葉に瑛理と綾女が同意した。その後も女性たちの相談は
続き、その中で柳もいくつか用意し忘れていた物に気がつき、それ
ぞれは用意を整えたのだった。

二話（後書き）

ほとんど推敲せずに出してしまいました……。

いやすみません。

三話（前書き）

クリスマスもイブも暇な作者は、小説を書いてました……。

三話

深夜零時を少し過ぎ、日付が変わった直後、ギルド『青空』の面々は、静かに隊列を組み、松明の明かりを頼りに森を歩いていた。藪をかき分け、ところどころ地面から飛び出ている木の枝に躓かないように気をつけながら、ゆっくりと、しかし確実に歩を進めていく。

時々飛び出してくるモンスターは、きっかり五百名もの猛者たちに、一撃で沈められていく。落とされたアイテムも、誰も拾わず、真つ暗な森の中で、小さく輝いている。

長い長い人の列は、ところどころ列を乱しつつも、全体としてはひとつの川の流れのように、止まることなく、進んでゆく。

「しかしこんなところから海岸に出れたとはね……」

香苗が小さく呟く。

今歩いているのは、かなり初期のダンジョン、レベル十を超えたばかりのプレイヤーが訪れる、決して難易度の高くないダンジョン。故に、上級プレイヤーは気がつかなかったのだろう。レベルが二十を超えてしまえば、このような所に好んでやってくる人間はまずいない。

途中から道をそれ、やたらと歩きにくい道を突き進むこと、すでに二十分以上、茨が生えていたりして、油断していると思いのほかダメージを食らってしまう。

うんざりする行軍は、未開拓の地に足を踏み入れるという興奮と根性だけで続けられた。

俯きがちになったプレイヤーの耳に、微かに波の音が聞こえたのは、その後一時間近くも歩いた後だった。

「もうすぐだ。もうすぐで船が見えるぞ！」

人の話し声がさっぱり途絶えていたのが、この一言で、一気に活気づいた。

ゴールが見え始めてからは、あつという間だった。目の前にふさがる茨を叩き切って、砂浜に飛び出すプレイヤーたち。人々は歓声を上げ、砂浜に足を取られながら、棧橋目指して駆けてゆく。

そのまま棧橋を渡りきって、船に乗り込もうとするメンバーを、ギルドマスターの裕が引き止める。

「ちよつと待った。船は全員が一堂に会するほどのスペースがないから、一度ここで出発式をやるうじゃないか。というわけでまだ船に乗るな」

一番最初に船に突っ込もうとした若者を押し留めて、棧橋の近くの砂浜で待つように促し、メンバーの最後尾が砂浜まで出てくるのを待つ。

最後に殿を務めていた和が出てきたのを確認し、裕がよく通る声で呼びかける。

「皆、出発式をやるから、はやる気持ちを抑えて集まってくれ」

さすがに五百もの人間をまとめ上げるのは容易ではなかったが、それでも大体の人間が裕の方に耳を傾けたのを確認して、話し始めた。

「見ての通り、皆の目の前には、大きな船が一隻ある。ここにきて引き返そうと考えている者はいないだろうと思う」

「勿論だー！」

今日は誰もが、いつもよりノリがいい。

「この船が向かうは、未だ未開の地。未だ開かれぬ沢山の宝と、未だ知られぬ多くの知識が眠る地に違いない」

「おおー！！」

「この先には、未知の罠と、未知の敵がいるだろう」

「わあー！！」

最早意味も分からずに叫んでいる。

「覚悟はできているか？」

「ぎゃー！！」

これはもう何を言っても無駄だと悟り、裕は締めに入る。

「では、いざ未開の地へ。沢山の宝を持って、皆で帰還しようっ！
！」

「イエーイー！！！！！」

なんかごたごたではあったが、とりあえず出発式を終え、人員確認をして、船に乗り込んだ。

五百人も乗っているにもかかわらず、十分な広さを残している船は、豪華絢爛、とても未知の島へ向かう開拓の船とは思えない、どう考えても豪華客船だった。絶対もつと乗れるだろうという感じのこの船は、定員まで乗ったことを確認すると、自動で動き出した。
「とうとう出発かあ……」

香苗が感慨深げに呟いていた。船が出てしまえば、いつこちらの大陸に戻ってこれるかは分からない。徐々に陸から離れていく様子を、多くのメンバーが甲板から眺めていた。

そんな中、感慨も何もない人間が、早速船の中の構造を把握しようと、廊下を速足で歩いていった。勿論柳である。ふと、柳が足を止めた。

「……マスター！？！」

柳の前に突如現れたのは、ギルドマスターの裕だった。

「ああ、柳君。君は外を見なくていいのかい？」

「……あんまり興味ないんで」

「そのようだね……、まあ、かくいう僕も、君同様、ああいったのにはあまり興味はないんだけどね。ところで和を見なかったかい？」

「……、呼んだ？」

「……」

いつの間にか、柳の真後ろに、黒いローブを着た男が立っていた。和である。

「ああ、そんなとこにいたか。ところでこの船、いつ頃に着くのか知らないか？うっかり到着予定時刻を見ないで乗ってしまったてね」

「明々後日の昼」

「そっか、じゃあしばらくはゆっくりできるな。よし、せっかくだ

から情緒を解さない三人で、ゆったりと談笑でもしようじゃないか」
裕の勝手な決定により、柳は強制的に二人と（ほとんどずっと裕がなんか喋っていたただけだが）お話する羽目になった。

それぞれの部屋は、自動的に割り振られた。柳は三階、裕の向かいの部屋だった。

「おはよう。柳君」

「……おはようございます」

結局、柳たちは昨日は裕の話に付き合わされたあと、三人で船のあちこちを見て回った。そして今日、朝起きて、軽く洗面などを済ませて部屋から出た柳の目の前に、裕が立っていた。

勿論、目の前の部屋にいるのだから、裕がそこにいること自体は何ら不思議でない。しかし、どう見ても柳を待ち伏せしていたというか、廊下の壁にもたれ掛かって、絶対に結構前からそこにいた感じである。

「……何の用ですか」

「柳君、武器を用意して。朝食を済ませたら下に降りるよ」

「あそこに行くんですか？」

「勿論。ほら、早く用意して。食堂からそのまま行くよ」

裕が言っているのは、三人が昨日見つけた、船の中のダンジョン。乗員の部屋が二・三階にあり、その他の施設が二階から四階にあるのだが、一階には、なんとダンジョンがあることが解ったのだ。

「他のメンバーは連れて行かないのですか？」

「和は来るよ。あとはまあ、これは僕の独断だし。ギルドとして行くのではなく、僕たちが個人的に攻略に行くだけだしね」

「新たなダンジョンの発見はギルドへの報告が義務付けられてませんかでした？」

「そんな堅いこと言わないの」

「マスター自らギルドの掟を破ってどうするんですか……」

「早くしないと、到着までにクリアできないよ？」

柳の追及を誤魔化して、裕は柳を連れて食堂に向かった。

昨日一日話していて分かったことだが、この小笠原裕という男は、細長い見た目とは裏腹に、かなり豪快というか、上手いこと周りを丸めこむ性質の持ち主というか、厄介な性質を備えていた。それでいて憎めないのだから性質が悪い。

まだ朝が早いせいにか、食堂には人が少なく、柳たちは広々とした空間で、せっせと朝食を掻き込んだ。

……豪華な朝食が勿体無い。

朝食を終えると、いつの間にか和が合流していて、三人は、ひっそりと一階に向かった。

船に入ってきたときには、棧橋から魔法で船内に転送されたため、実は一階は通っていない。一階に行くには、船尾に近いところの、倉庫のような部屋から行かなくてはならない。

下に降りる階段を塞ぐ木の板には、『推奨レベル三十以上』と書かれていた。

「まあ、レベル的には多少、余裕があるかな」

そう言って、裕が後ろに続く二人に最終的な意思確認をする。：

形だけ。

「では行こうか」

そう言って、裕は木の蓋をどけ、そこから下る急な階段に足をかけた。

裕もギルドマスターと言うだけあって、レベルはそこそこ高かった。彼のレベルは三十三。柳は四十、和は三十八だった。しかしこの世界は何もレベルがそのままその人の実力を表している訳ではない。キーボードを叩く普通のゲームとは違い、その人の運動のセンスが、実力に大きく影響してくる。

レベルが上がると、体の筋力や瞬発力などが上がり、あとは装備の制限が変化したり、体力がついたり、それからライフが多くなったりするのだが、流石に運動のセンスまでは上がらない。さらに和のような魔法使い系は、呪文を詠唱したり、空間にルーンを刻んだ

りして、魔法を放つのだが、呪文の詠唱スピードや、ルーンを刻む速度は、単純に練習することでは上がらない。そういった意味で、各人の能力が、戦力に大きく影響してくるのだ。

どうやら前衛職らしい、刀を持った裕が先頭になり、階段をさつさと降りた。ちなみに、殿は柳がやっている。後ろからモンスターが出現する可能性もあるからだ。

薄暗い、幅二メートル程しかない廊下を進むこと、五分、最初の敵に遭遇した。

「シャアアア……」

低い唸り声？を上げているのは、蛇の形をしたモンスター。裕の前に出現し、蛇にしては鋭くて長すぎる牙から、毒があると思えない紫色の涎を垂らしている。

「けっこう強そうだねえ」

裕は呟き、刀を正眼に構えた。いきなり、蛇が飛びかかってきた。どうやらこいつはアクティブのモンスターのような。このレベルなら当然か。

蛇に似合わないジャンプじみたことをして飛びかかってくる蛇に、裕は一瞬動揺するも、刀で上手く攻撃を逸らしつつ、壁によることで、蛇の攻撃を回避した。

蛇は飛びかかった勢いで、裕の横を通り過ぎ、和の方に飛んで行った。

空中で自由の利かない餌食蛇形モンスターに対して、和が何か呟く。

途端、和の手からバスケットボール大の炎が上がり、一直線に敵へと飛んでゆき、飲み込んだ。

「シャアアアアア！」

炎に包まれた蛇が和の手前で墜落し、のた打ち回っている。そこに、絶妙なタイミングで裕が切りかかり、頭を切った。赤いエフェクトが走り、敵のライフを一気に削る。しかしなかなかしぶといその敵は、煙を上げながら、裕に噛み付こうとする。裕は開いた口に刀を突き刺し、噛まれる前に、止めを刺した。

ライフを完全に失ったその蛇型モンスターは、白い光を大量に撒き散らして、消えていった。

「なかなかしぶとい奴だったな」

裕が呟いたのとほぼ同時に、経験知獲得を示す白い文字が、パーティを組んでいた三人の視界の隅に映った。

「和さん……、呪文、記憶してるんですか？」

和は、戦闘中、手に持った魔導書を開くことなく、呪文を唱えた。しかし呪文は無数にあり、しかも意味不明な言葉の羅列な為、一つ覚えるだけでもけっこう大変なのだ。よって、大抵の魔法使いは、魔導書の検索機能を利用して、それを読み上げることによって魔法を行使する。普通、見ないで唱えるのは、よっぽど得意な呪文だけである。しかし、和は明らかに、状況に合った、獣系のモンスターの大半が苦手とする炎系の、詠唱時間の短い下級の魔法を使っていた。偶々得意な呪文だったということもあり得るが、柳はどうもそうでない気がしたのだ。

「和は大抵の呪文は暗記しているよ。なんでも魔導書に検索をかける時間が惜しいんだそうだ。まあ、それに和が本気になったら、呪文の詠唱とルーンの刻印を同時にこなすからね。どの道あれは呪文を完全に暗記していないとできないだろうからね」

「同時につて……」

とんでもない人もいるものだ。柳はそう思った。呪文の詠唱とルーンの刻印を同時にこなす人など、柳は聞いたことも見たこともなかった。というか、そんなこと考えもしなかった。それはつまり、一人で同時に二つの魔法を使えるということ。或いは魔法使いの長い詠唱によって生まれる大きな隙を埋めることのできる、画期的な方法だった。

「いったいどんな記憶力してるんですか……」

柳はぼやきつつ、歩き始めた裕たちに着いて行った。

三話（後書き）

ああ、でっかい船に乗りたいなあ。

四話（前書き）

なんか自分では信じられないペースで更新しているのですが……
これも冬休みの恩恵か

四話

「はっ！」

「ぴぎゃああ」

気色悪い蛇のモンスターを切り倒し、天井から襲いかかってくる蜘蛛の攻撃を避け、群がるコウモリのモンスターを叩きつけ、女性の天敵としか言いようのないダンジョンで、柳たちは休む間もなく武器を振るっていた。

「ちよつと敵が多すぎないかな」

裕がうんざりといった様子で蜘蛛の足を切り落としている。

気持ち悪いとかそういった感覚の薄い三人は、容赦なく敵を倒していくが、ちよつと異常な数の敵だ。

「本来もつと大人数で来るべきダンジョンだね、これ」

体をしっかり動かしながらも、裕は何かと喋っている。柳とは正反対のタイプだ。

柳は、道具を節約しているのもあって、普段のような勢いで敵を倒せていない。

「柳君、本気を出さないと、ちよつとやばいかもよ。安心するとい。船には店もあつたから」

そうは言っても、船の店で売っているアイテムは、柳が戦闘用に使っているアイテムとは全く違う種類のものである。とはいえ、このままではコウモリ共に食らわされるダメージが蓄積するばかりだ。柳は仕方ないと思い、腰のポーチに手を伸ばす。

裕と和を巻き込まないように細心の注意を払って投げられた『フアイアーボム』は、飛び交うコウモリを大量に巻き込み、その先にいた蜘蛛の一群を焼き尽くした。

流石に蜘蛛は一撃ではやられなかったが、コウモリは単体での実力は皆無なので、爆発に巻き込まれたコウモリはほぼ全て光となつて消えた。

さらに柳は呪文の詠唱を開始する。職業が魔法剣士である柳は、和のような強力な魔法は使えないものの、剣を使って戦闘しながら魔法を扱えるため、呪文詠唱の隙がない。さらに魔法剣士の呪文は、記憶していないと使えないためか、魔法使いの呪文よりは十分簡単なのだ。

「……ファイアーバリット」

呪文の最後に技の名前を宣言。柳の左手から無数に放たれた炎の弾丸は、敵の数を一気に減らす。

柳が本気を出し、さらに和も惜しみなく魔力を使って魔法を放ったので、ほどなくして敵は全滅した。

「……ふう、何とか勝てたか。二人とも、魔力はどのくらい残っている？」

裕の問いかけに、二人はメニューを開いて自身のステータスを確認し、二人とも八割五分くらいだと答えた。

柳がポーチにアイテムを補充している間に、裕は真剣な顔つきで考えていた。

「……このペースで消耗していけば、柳君のアイテムが真っ先になくなるか、あのコウモリモンスターさえいなければ、何とかなるんだけれど。明らかにつけたら近寄ってこないとかないかな。後は体力の問題もあるか……。あの二人は僕よりは持つだろうけど、一回の戦闘で一割近くが減ってしまったな……。ヒーラー再出現がいけない以上、休息による回復しかないか。しかし回復するより早くリポップするよなあ……」

ブツブツと裕が呟いていると、ふと、近くに何かの気配を感じた。

「敵かつ！？」

裕が振り返ると、そこには、少し大きめの眼鏡をかけて、ヒーラーの格好をした、人のよさそうな男が立っていた。彼からは、なぜか強烈なミントの香りが漂っている。

「何かお困りかな？」

その男は、裕を見て、ゆったりと聞いてきた。まるでここがダン

ジョン内であることを忘れているかの如くゆったりとした口調に、裕はしばし呆然としてしまった。

「えっと……？」

「回復役が欲しいとか、コウモリをどうにかしてくれとか、何か助けて欲しいことはありませんか」

「いや、まさにその通り、コウモリにも困っているし回復役がいなのにも困っているのだが……」

「じゃあ、私をパーティに加えてくれますよね？」

「あ、ああ」

珍しくペースを乱されている裕が、あとの二人に確認の視線を送ると、二人とも軽くうなずいた。

「で、回復役なのは分かるが、いったいどうやってここまで来たんだね」

「実はですね、私が調合生産したアイテムに自分の気配の隠蔽率をかなり高くできる物がありまして。それを使ったら、コウモリ以外の敵に一切攻撃されずに来れたんですよ」

「なんじゃそりや……、そんな反則じみたアイテムがあるのか」

この世界では、かなり複雑な生産が存在する。実際、発明を生業としている人もいるくらい、無数の組み合わせによって無数の生産品が作れるようになっていたのだ。それを可能としたのは、近年開発された、『人工知能による開発システム』。通称、『三次的生産システム』。高度に進化した人工知能が、人間の手を借りずに新たなソフトウェアを開発してゆく生産方法だ。これにより、人間には到底成し得ない速度でのソフトウェア開発と、ほとんどバグのない完全なソフトが生産されるようになった。この世界も、ある程度の指向を人間が与えただけで、後は全てこのシステムにのっとって作られた、考えられないほど複雑なプログラムによって造られた世界なのである。それにより、普通の人が発見していない生産品を持っていたりする人も、多々いるのである。この男もその一人だったということだろう。

「まあ、そうはいつでも、コウモリみたいに超音波で敵の位置を探るようなやつにはあまり関係ないんですけどね」

「じゃあコウモリはどうしたんだ。ヒーラーが一人でここまで来れるとは思えないのだが」

「実はコウモリって、ミントの香りが苦手なんですよ。だからこの通り、ミントの葉をすり潰して携帯していれば、全く狙われないんですよ」

「つまり全く敵に狙われてないんじゃない……、ほとんど反則でしょう、それ」

「まあ、この気配の隠蔽の薬は、作るのにもコストはかかるし、持続しないしで、もう残ってないんですけどね。あ、効果切れちゃいましたね。今」

「え……」

「ミントの方はけっこう残っているんで安心してください」

「しかしじゃあなんでこんなところに、そんな高いアイテムを使つてまで来ているんだ。というかいったいどうやって帰るつもりだったんだ」

「ちよつと、珍しいモンスターがいたもので、観察していたのですが、ふとギルドマスターの声が聞こえた気がしまして、なんかギルドの掟に新ダンジョンの発見は云々といったものがあつたかなあと思ひまして……、とつさに隠れたのは良かったのですがなんだか気になってしまって、後をつけていたらなんだか困っているようでしたので。といった具合です」

「所詮ギルドの掟なんか誰も守らないか……、と、僕が言えた義理じゃないね。とにかく、そのミントの葉が余っているのなら、分けてくれないかな。生憎とそんな物を持ち合わせていそうな人間は僕達の中にはいないのでね」

「いいですよ。ちなみにこれは船の売店で一枚五十円で売っていました」

「気がつかなかったな。というかそれを見てもコウモリ除けに使え

るなんて思わないけど、普通。ところで君の名前は？」

「私の名は妊しんと申します。あなたはマスターの小笠原裕おがさわらゆうさんですね。そちらはサブマスの黒澤和くろさわやまとさんに、えーと、あなたはもしや、『沈黙の柳』では？」

「……えつと、まあ、そうだけど」

この『沈黙の柳』という呼称は、はつきり言っただけでほとんど知られていない。なんで妊が知っているのかは全くの謎だ。そもそもこの愛称は誰かが柳の戦い方を見て勝手につけて、そう呼んでいただけで、別に柳自身そんな有名人ではない、はずなのだが、無駄に雑学の知識が多い妊は、どうやってか知っていたらしい。

妊を加えた彼ら一行は、その後はコウモリの断続的ダメージを受けずに済んだので、ほとんど一本道の通路を、けっこうなスピードで進むことができた。

妊のレベルは決して高くはなかったが（レベルは二十五だった）、元々回復役であり、柳たちもそれほどかいダメージは食らわなかったため、難なく進むことができた。

順調に進むこと一時間ほど、延々と続いた一本道が、とうとう終わりを見せた。

「何だあの扉は」

先頭を歩く裕が指差したのは、木造のこの道に似合わない大きな鉄の扉。それが二つ並んでいた。

「何か書いてありますね」

なんだか視力の良い妊が、この薄暗い中で、扉に彫られているゴシック体の文字の存在に気がついた。

近くに寄って見ると、右の扉にはこう書かれていた。

「推奨レベル三十五以上」

左の扉には、こう書かれていた。

「覚悟せよ。（推奨レベル三十以上）」

「なんかさっぱりしすぎでは……」

「まあ、いいんじゃないですか、要は内容さえ伝われば……」

「まあ確かに、どんなにそれっぽく書いてあっても、少なくとも後ろの二人は気にも留めないだろうね……」

「どうしますか、安全に左に行つて、多分いるであろうボスを倒して引き揚げるか、もっと奥を目指すか……」

「まあ、このメンバーならまだいけるだろう。奥に行こうか」

裕が素早く決断して、柳達一行はさらに奥へと行くことになった。扉をくぐると、そこはまたもや一本道で、しかも雰囲気さつきまでと全く同じだった。

「なんかこの辺の開発に全然力を入れていない気がするのですが……」

「そんなはずはないんですけどねえ」

同じような景色にうんざりしながらも、裕たちは油断なく進んでいく。

「ガラガラカラ……」

なんか嫌な音がしたと思って目を凝らすと、ヒト型をしたしかなんだか肉がほとんど付いていない、所謂骸骨が現れた。しかもその数の多いこと、柳達四人に対して、その五倍の二十匹はいるようだった。

「一気に難易度上がりましたね」

裕はそう呟くと、敵の出方を伺った。

「あれは確かハイ・スケルトンだな。物理攻撃しか持たないが意外と強力だぞ」

和が前に行く裕に注意を促す。

「破壊しても再生するのではなかったですか」

妊が言った。

「一応再生じゃなくて、リポップ扱いになるみたいだけど、リポップ時間が五分だっけ、短すぎるから、全員ぎりぎり生きてる状態で留めておいて、最後に一気に潰すしかないはずだよ」

裕が有効な対処手段を思い出しながら呟き、それがそのまま作戦となる。

「来るよ」

裕が言ったのとはほぼ同時に、ハイ・スケルトンが急に走り出した。体中の骨をガタガタいわせながら、襲いかかる化け物達に、臆することなく刀を振るう裕。幸い、通路が狭いので、一度に全員を相手しなくて済む。

序盤こそ調節を誤り、数匹倒してしまい、後から体力満タンの敵が再出現してしまったりしたが、慣れてくると、四人がうまく連携して、体力の残り少ない敵の動きを封じたりしながら、四十分近くかけて、敵を弱らせた。

「よし、もういけるだろう。柳君、君は和をしばらく守ってくれ。和が一発で殲滅してくれるはずだ」

裕の指示に無言で従い、柳は和を庇う様な位置に付けた。裕は敵を上手くおびき寄せたりして、時間稼ぎと、敵を一か所に集める作業を行った。

「……然らば地獄の業火よ、全てを飲み込まん」

和が最後の句を詠唱すると、そのタイミングをすっかり分かっていた裕が、和の後ろまで退避した。

「ごう」と、凄まじい音を立てて放たれた広範囲にそれなりのダメージを与える魔法、『ヘル・ファイア』は、骸骨の化け物を一匹残らず消し去った。

五分が経過する前に、ハイ・スケルトンの索敵範囲から逃れようと、柳達は足早にその場を去った。

四話（後書き）

システムの説明とか分かりづらいですかね……
まあ、読み飛ばしても問題ないようなところですが。

五話（前書き）

今回はいつもより長くなっちゃいました。
今までスキルについての記述がなかったんですね……
初めて気がついて焦りました……

五話

扉を潜ってからは、分かれ道が多く見られるようになった。だんだんとダンジョンらしくなってきた『船底のダンジョン』では、分かれ道に差し掛かる度に、裕が素晴らしい速さで決断し、たまに行き止まりに差し掛かるも、ほとんど一本道の如きペースで進んでいた。まあこれが正しい道だという保証はないが。

「ギヤアアア」

現れる敵も、扉を潜る前と後では、強さが全然違う。四人とも、体力が七割を切ることそないものの、絶対に「死亡」するわけにはいかない。表情には余裕がない。気がする。なんといってもこの四人、全くと言っていいほど、感情が表情に反映されていない。柳は常時しかめっ面、和はフードに隠れて表情は見えづらいし、姪は常ににこにこしている。この中で一番表情に変化がある裕も、何か奥がありそうな表情である。邪推かもしれないが。

戦闘が終わるごとに、裕が全員の魔力の残量や、残り体力を確認し、さらに進んでも大丈夫かと常に気を配っている。

一度死んだらそのままこの電脳空間から追放される。そのプレッシャーがある限り、プレイヤーは安易に戦闘を行うわけにはいかない。

常に安全策を取って、それでも「死亡」するプレイヤーがいる。そのスリルを求めた者達だからこそ、この世界から離れたくない。絶対に死にたくないものだ。

「柳君、アイテムのストックは大丈夫かい」

「このダンジョン内では問題ないですが、島に着いたら無くなつてますよ」

「それは弱ったな、その『ファイアーボム』が島で売っている保証はないし、生産でそれは作れないだろうしね。こんなところで消耗している場合では無いのだが」

それは無論柳も分かっている。それでも、まだ広がる未知の世界を前にして、引き下がることはできないものだ。

「その辺は、何とかしますよ」

柳は裕の迷いを振り払うべく、そう言ったのであった。

柳達がその大きな扉を見つけたのは、前の扉を潜ってから二時間が経過した頃だった。

ゴシック体の文字で安っぽく、「推奨レベル〇〇以上」などと書かれている扉とはわけが違う、荘厳な作りの、美しい線が深く、力強く彫られているその扉は、縦・横共に二メートルはあるだろうかという、巨大な門だった。

「おそらくこの先にはボスがいるんだろうね」

裕がゆっくりと言った。

「推奨レベル三十五以上のダンジョンのボスと言えば、イフリート辺りですか」

「そうだね、あれが出たのはサラナ火山だったね。和、あそこの推奨レベルっていくつだったっけ」

「三十五」

「ということは、イフリートクラスのボスがこの先にいるということだろうが」

そう言いながら、裕は対イフリート戦、ギルド『青空』が発見した、サラナ火山での戦いを思い出す。

「あのときはうちから一人死者を出してしまったからな」

腕に自信のある者たちが集まり、計四十人もの実力者が集まって挑んだイフリート戦、青空が発見したダンジョンということもあって、青空からは積極的にメンバーがボス戦に参加した。参加したメンバーは全員三十レベルを超え、実力十分だった。しかしイフリートの攻撃力が予想以上だった。ボス戦は始めれば脱出不能になるのがこの世界での通例なので、敵の情報が無い状態で戦闘が始まったのだが、イフリートの攻撃力は異常だった。三十レベルを少し超え

ただけの者や、体力の少ない後衛系の職業の者は、イフリートの攻撃一撃一撃が致命的、一発で体力の三割近くをもっていられるという、恐ろしい戦いだっただ。

その分、イフリートの体力は少なく、討伐自体にはさしたる時間は掛からなかったものの、暑すぎるダンジョンでの継続ダメージに加えた強力な攻撃は、プレイヤーに少しの油断も許さなかった。

結果、ポジションでの体力回復が間に合わなかったレベル三十の、実力十分な青年が儂くも散った。

「もつと戦力を整えてから来るべきかな」

裕の呟きに、柳が答えた。

「多分、イフリートほどは強くないですよ」

「ここのボスがかい？」

「まあ、あれだけ細い道が続いたんですから」

「まあ、確かにあの道の細さは、明らかに大勢で来ることを想定していない、多くて六人パーティ用のダンジョンだろうね。コウモリだってちゃんと対処法はあった訳だし。となればボスもその程度の実力である可能性が高い。が……、このゲームの特性を考えると、何とも言えないな……」

裕が危ぶんでいるのは、この世界に時々見られる、理不尽な難しさである。一度も死ぬわけにはいかないのに、理不尽なまでに危険な罠が、時々あるのだ。それこそ運を天に任せるような危険が、時々見られる。これはスリルを味わいたいという指向に基づいてなされた仕組みなのだが、ちよつと行きすぎな仕組みであると言われている。まあ、ここを作った人工知能に文句をつけても詮なきことではあるが。

「でも、これ以上のメンバーと言うのもそうそういいかも知れませんがね」

妊がぼそつと言った。

「確かに……」

ここにいるのは、現在この船に乗っているメンバーの中では最強

のメンバーと言って差し支えないだろう。妊はともかく、柳と和は、このギルドでは抜きん出て強いのだ。それに裕の刀捌きは、かなりのものである。

「しかし皆、というか、妊君はいいのか、この中では明らかに君が一番危険な目に合うことになるぞ」

「まあ、いいでしょう。これほどのメンバーと組める機会もそうあることではありませんし、私は回復訳ですから、戦闘中は常に安全圏でみなさんを応援させていただきます」

「よし、まあ、後の二人は意見を聞くまでもないな。よし、行こう」
柳と和はどうせ聞いても「行く」としか言わないだろうと踏んで、裕は大きな鉄の扉に手をかけた。

「ギイイイイイ」

明らかに油が足りてない、嫌な音を発し、柳達を、ボスの間へと招き入れた。

やはりそこも木で造られた部屋は、一辺がおよそ四十メートル、やはりあまり大人数で押し掛けるような部屋ではなさそうだ。障害物の類はほとんどなく、ただし今までの部屋より天井が明らかに高い。あの船にこんな空間があったとは到底思えないのだが、そこは仮想世界、あまり細かいことを気にしているとやっていけない。

柳達がざっと見たところ、部屋には全く何もなかった。警戒しながら柳達が部屋の中央に向かうと、「ギギギギ」という嫌な音を立てて、扉が勢いよく閉まった。

「来るよ」

裕がそう呟いたのとはほぼ同時に、部屋の奥、柳達からおよそ十メートル前方に、半月刀をもった巨体が現れた。

ボスモンスターには珍しく、何のエフェクトもなくひっそりと現れたそいつは、身長がおよそ二メートル五十センチ、アンデッド系モンスター特有の、何所か不自然な動きで、ゆっくりと、視線を柳達に合わせた。

爛れた肉、失われた眼球、ところどころ突き出たいかにも脆そう

な骨を申し訳程度に覆っているボロボロの海賊服、動作を見なくても、アンドッド系だと確信させるに十分な格好だった。

「どうせこれを倒したらワープで戻れるだろう。出し惜しみはいらないね」

裕がそう言つて、現れた敵、『パイレートゴースト』へと走り出す。裕の持つ刀は柄に納められたままである。

対するに、パイレートゴーストは、その余りにも大きな半月刀を、斜め上に構え、力任せに振り下ろした。大ぶりな分、軌道は見え見えだったので、初撃を難なくかわした裕は、刀を柄に収めたまま射程に敵を捉え、一瞬の溜めの後、刀を凄まじい勢いで抜き放った。

スキルの使用を示す紫のエフェクトが刀を包み、自動で加速された刀が、目にも留らぬ速さで切りつけた。そこでスキルは終わらず、振りぬいた状態から返す刀で切りつける。

通常よりも遥かに強い初撃と、間髪いれずに二撃目を放つ、刀専用スキル、『居合い』。出し惜しみしないという宣言通り、裕は初撃で敵の体力の五パーセント近くを削った。しかしその代償に、スキルの使用は行使者に急激な体力の消耗を課す。技の勢いを生かして、肩で息をしながら、裕は敵と距離を取る。

それに続いて、柳のファイアーボムと、和の『ファイアーランス』が襲いかかる。

ちなみに、魔法はスキルには含まれない。スキルは行使者の体力と、物によつては魔力を消費して放たれるが、魔法は魔力の消費しかない。

強力な炎に包まれたパイレートゴーストは、雄たけびを上げながら、突進してきた柳に狙いをつける。柳はスキルは使わず、代わりに呪文を唱えつつ剣で切りかかる。

武器の圧倒的リーチと重さの違いから、鏝迫り合いという状況は起こり得ない。どう見ても柳の剣が弾かれる。柳は上手くよけたり、受け流したりしながら、確実に敵に攻撃を加えていく。

少し休んで息が落ち着いた裕は、柳の反対側から敵に切りかかる。

二人は大ぶりの敵の攻撃をしつかりとよけながら、ダメージを与えていった。

大きなダメージのないまま、パイレートゴーストのライフが七割まで減少したところで、敵の様子に変化が見られた。「グオオオオオオオオ」と、大きな雄たけびを上げたパイレートゴーストの体が一瞬膨らんだかと思うと、残っていた肉が、一気に弾け飛んだ。「うわっ」

近くで直接攻撃を加えていた柳と裕は、飛来する肉塊をかわすことができずに、吹き飛ばされた。

数メートル吹き飛ばされた柳がすぐに起き上がると、目の前には、今までよりも遥かに速い速度で襲いかかってくるボス、パイレートゴーストの姿があった。

急に速くなった敵の動きに着いてゆけず、柳はかわすことができなかった。振り下ろす速度も速くなった敵の攻撃を、柳は片手用の剣を両手で握って受け止めたが、肉を落として骸骨戦士と化した敵の、しかし今までに遜色ない威力の攻撃に、受け切れなかった。

さっきよりも遥かに長い距離弾き飛ばされた柳は、紡いでいた呪文が中断され、壁に衝突してやっと止まった。見ると柳のライフは、受け止めたにも関わらず、今の一撃だけで一割近くがなくなっていた。

「柳君!!」

裕は柳に追撃をかけようとする敵に、後ろから切りかかった。防御の方は前と変わりないようだが、肉がなくなった分、攻撃が当たりづらい。しかもさっきまでより素早くなったパイレートゴーストは厄介だった。

連続攻撃を食らったら致命傷になりかねない。そういった考えが、柳達前衛を追い詰め、焦らせた。

それでも彼らは相手の速度に目を慣らして、すぐに対応し始める。そこは流石というか、伊達にレベルを上げている訳じゃない。

敵の攻撃力が大きいため、体力が七割を切るとすぐに回復するよ

うにしながら、柳達は攻撃を重ねていった。敵の体力が三割を切ったあたりで、三人はラッシュに入った。柳は、普段普通の敵相手にはまず使わない、片手剣用スキル、『バウンドインパクト』を放った。紫のエフェクトに包まれて、柳の細長い剣が左から右、右から左と凄まじい速さの返して往復、息が上がるのにも構わずそのまま連続で攻撃を叩き込み、それが特大の半月刀に阻まれたと見るや、左手からファイアーバリットを放つ。

魔法使用後のわずかな硬直の間に、柳に代わって裕が切りかかる。鋭い斬撃はしっかりと敵の注意をひきつけ、柳に攻撃が行かないようにする。裕が何発か打ちこむ間に体制を立て直した柳は、パイレートゴーストから離れる方向に飛ぶ。それに合わせて裕もパイレートゴーストにタックルをしてのけ反らせ、そのすきに自分も距離をとる。直後、呪文の詠唱を終えて右手に青い光を灯していた和が、手をパイレートゴーストに向かって軽く振る。

空中を凄まじい速さで飛んだ青い光の弾は、狙い違わずパイレートゴーストの体の真ん中を捉え、着弾した瞬間に広がった光はパイレートゴーストを覆う氷となる。一秒近い行動不能^{スタン}を課せられた敵は、その隙に猛攻を振るう柳達の攻撃を防ぐことすらできない。

「ばしい」

爽やかな音を立てて砕け散った氷は、瞬く間に霧散し、その後ろから反撃をしようとしてつもない力で武器を振るう骸骨。いつの間にか更にすかすかになってしまった体からは想像もつかないほどの重い一撃が繰り出される。それは二人とも何とかかわすも、続いて横に払われた半月刀を避けきれない。柳が受け流そうとしたが、うまく軌道を逸らしきれずに弾き飛ばされる。

七割を切った柳のライフを見て、妊がすかさず回復魔法を唱える。しかし妊のレベルはそこまで高くないため、魔力がこれで底をついた。

「もう回復できませんよっ！」

「大丈夫、このまま押し切れる」

妊の声に力強く返答を返し、裕は一気にたたみ掛ける。この段階で、敵のライフは一割を切り、その残量を示す棒が赤くなっている。すぐに柳も加勢し、裕の反対から切りかかった。

「うおおおおああああ」

最後に和の魔法が炸裂し、パイレートゴーストは大音響の叫びをあげて崩れ落ちた。

「……………ふう」

「終わった……………」

「……………」

「……………ふう、終わりましたね」

復活しないことを確認して、四人はその場に腰を下ろした。パイレートゴーストのいた場所には、いつの間にかほのかに光る立方体のアイテムボックスが三つ落ちている。ほとんど体力を消耗していない妊がをれを拾い、表面に書かれた文字を確認する。

「まずこれは……………、死者の肉（500グラム）ですか、いったい何に使えるんですかね、これ。えっと、こっちは……………、お、転移魔法陣ですか。こいつはかなりレアですねえ。もうひとつは……………、おお！！カナガシ草（×10）じゃあないですか。ぜひとも私が欲しいですね。これの採集って大変なんですよ……………」

と、一人妊がアイテムの品定めを行っている間、他の面々は部屋の奥を見つめていた。

部屋の奥に現れたのは、転移ゲート。これがきつと船の二階辺りに運んでくれるはずだ。特に前衛の二人は少しの油断も許されない戦いだったので、体力的にも、精神的にも疲労がたまっていた。

「では、とりあえずアイテムの分配だけやっちゃいましょうか」

裕が妊の方を見ながら言った。

結局、カナガシ草は妊が、転移魔法陣は裕が、途中で手に入れたものを含む残りを柳と和が分けた。ちなみに死者の肉は柳が貰い受けたそうだ。何に使うつもりなのかは不明だったが。

「よし、分配も済んだことだし、戻ろうか」

裕が言って、ゲートへと歩き出す。他のみんなも、ゲートに向かってゆつくりと歩き出した。

そのころ他の乗員の中では、二つの騒ぎが起こっていた。一つはギルドマスターの裕とサブマスターの和が行方不明ということ。そしてもう一つは……

五話（後書き）

なんかいい技の名前が思いつかない……。

六話

「ねえ、綾女、どう思う」

「うーん、大丈夫じゃない？ 香苗ちゃんはどう思う？」

「この非常時にマスターが朝からいないのはちょっと不安ね……。多分気が付いていないだけだけど」

「でも部屋にもいなかったんでしょ……。噂によるとこの船の一階にダンジョンがあるらしいし、もしかしてそこでフラグを立てた可能性もあるんじゃないかな。そもそもマスターには速いとこ今後の方針を決めて貰わないといけないのに、もしもこのフラグを立てたのがマスターだったら、私は本気で切れるよ……」

言いながら、瑛理から殺気が立ち上る。

「ま、まあ、そんなことないんじゃないかな、うちのマスターは結構しつかりしているんだし」

「どうだか……」

香苗が必死に宥めるも、瑛理の殺気は膨れ上がり続ける。

しかしイライラしているのは彼女だけではなかった。別に裕に対してと言うよりは、先の見えない恐怖、予想外の事態に誰もが混乱しているのだ。

話は朝、柳達がコウモリの群れと戦っていたところに遡る。

「大変だっ」

「どうしたっ」

「とにかく大変だっ」

「何が大変なんだ」

「マジでやばいって」

「やばいのは分かったって」

「どうしようどうしよう」

「だー、もう、だからどうしたんだよっ」

盛大に慌てながら、大変だと連呼する青年に、さつさと内容を言えと怒鳴る中年の男、どうしたどうしたと、周りの者たちが集まりだす。

「とりあえず落ち着け。何があった」

「そ、それが、まず大陸と連絡が取れない」

「連絡不可地域だってことか」

そう言いながら、周りの人々は手早く確認する。すると確かに、フレンド登録している相手に、メールを送ることができない。

「なんか厄介なところに向かってそうだな……。けどまだ到着までけつこうあるだろ。一体どれだけ広い範囲で連絡が封じられているんだ？」

「エリアで連絡できなく設定されてるんじゃないくて、この船自体がそういう設定なのかもよ」

この妙な設定に、集まった人々は表情を曇らせる。大抵、連絡が封じられるというのは、それ相応の厄介なイベントに繋がっている可能性が高い。特に、ここは船の上、連絡ができないということは、何が起こつても自分達でどうにかしないとイケなくなる。

「それだけじゃねえんだ。俺が言いたいのは」

この情報をもたらした青年が、未だ青ざめた表情で話す。

「俺が何気なくNPCと会話してたらよお、あいつら、この船が行く先は潮の流れが速くて大変だとか何とか言ってるんだよ」

「その何が大変なんだ」

「だってよお、通信不可な状態でだぞ、そんなところに行くつてことはだ、絶対厄介なイベントが発生するのを示唆してるだろ。普通に大陸に戻れるとは思わねえほうがいいんじゃないか？」

「そうかあ、考えすぎじゃねえか？まあ、NPCがどうでもいいことを話してるとも思えないから、ちよつとしたイベントは起こるかもしれないが……。そんなに大騒ぎするほどのもんでもないだろう」

「だって、五人くらいのNPCと話して、そいつらが全員行き先の島の周りで起こつた難破のこととか、潮の流れの激しさとか、あの

辺の海は魔獣が棲んでるとか言ってるんだぜ、絶対危ねえって」

「それはけっこうおっきなイベントが発生しそうだなあ。確かに一度マスターに言つといた方がいいかもしれない」

「だけどよお、その肝心のマスターがどこにもいないんだよお」

「そいつは困ったなあ……」

この話は噂に乗って、瞬く間に船中へと広がった。しかも尾ひれがあちこちで付くものだから、船中のメンバーに不安が広がったのである。肝心のマスター達一行だけは、ダンジョンにいたため気がつかなかったのだが。

光に包まれて、最初に船に乗った時に現れた、この船の出入り口とも呼べる場所（ワープポイントだが）に現れた、柳達一行。

「ふう、今日は疲れたね。後で余裕があつたらもう一度行つて、行かなかった道のマッピングも済ませたいところだけど、流石にそれはめんどいね。後はメンバーにやらせちゃおうか」

「おいしいところ取りじゃありませんか、マスター。メンバーが怒りますよ」

「何を言うか、姪君。僕たちはギルメンに危険が及ばないように、先にボスを攻略して、さらには出現するモンスターの情報まで集めてきたのではないか。感謝されるならともかく、怒られる覚えはないよ」

「詭弁ですね……」

そんな会話をしながら、騒ぎにも気がつかずにのんびりと歩く柳達一行。モンスターとの連戦で、誰もが部屋へと戻ろうとしていた。部屋に戻る途中、誰にも会わなかった柳達は、「妙に人がいないな……」などと呑気に話しながら、疲れていたために売店で簡単な食事を買って腹に詰め込み、後は真っ直ぐ自分の部屋に戻った。

そのころ他の人々は、三階にある大きなホールに集まっていた。

「……………というわけで、皆さんの意見を聞きたい」

普段議長を務める裕がいないので、代わりに入田いりだと言う四十歳くらいの男が議長を務め、今回の騒ぎについて話し合っていた。

「入田さん、とりあえずこの船のダンジョンに搜索隊を出した方がいいんじゃないでしょうか……、マスターならあそこにいる可能性もあるような気がします……」

「しかしマスターだってそこそこ強いんだし、仮に搜索隊を出したところで、マスターより早く進まないと追いつけないじゃないか」

「ム……、確かに」

「何か起こる前になるべく情報を集めといた方がいいんじゃないでしょうか」

「既に船に乗っているNPCの会話パターンはある程度解析されているから、もう情報は十分では？」

「しかし全部の会話パターンを試すことはできないじゃないですか。それなら可能な限り沢山の情報を引き出した方がいいのでは？」

「それにまだ隠れているNPCがいるかもしれないし……」

「情報収集もいいけど、ダンジョンの攻略も始めた方がいいと思います」

「イベントが発生したら船のダンジョンが関わってくるかも知れませんが、何の理由もなしにあんなところにダンジョンがあったりしないでしょう」

「吾輩の独自の調査では、あのダンジョンはかなりの難敵が出るぞ」

「おっさん、難敵ってどんな奴」

「大量のコウモリによる継続ダメージが厄介だ。一匹一匹は倒しても経験値も入らないような雑魚だがな」

「うわっ……、大量のコウモリとか、精神衛生上近寄らない方が賢明だな」

「他にも蛇や蜘蛛がおったぞ」

「私は絶対行かないからね……」

「でもあんまりいろんなことやらかすと危ないフラグが立つんじゃないか」

ないか……」

「それを恐れていたら何もできないだろう」

「でもせめてマスターを見つけるまではおとなしくしていた方が…

…」

「そもそもあのマスター、ほんとに戻ってくるんだろうな。ダンジョンに行つて、そのまま戻つてこなかったらどうするよ」

「その時は、新たなマスターを決めるしかないんじゃない……」

「しかし新たなギルドマスターを決定するには、ギルドのメンバーの三分の二以上が出席する総会で決定しなければならぬのではなかったか？大陸に残っているメンバーもいるから、決定のしようが無い」

「そこは仮のリーダーと言うことでいいんじゃない」

ガヤガヤと、集まった三百人近くのメンバーと、雇われた傭兵がそれぞれの意見を出す。大体の意見が出揃ったところで、入田がまじめに入る。

「では、現状で我々ができることは、二つ、ダンジョンの攻略と、情報の収集ということでもいいかな」

「いいですよー」

特に反対意見は出なかったので、入田はそのまま進める。

「では、他にやることも特にないだろうから、この二つを行うことにしましょう。それで、メンバー編成ですが……、まずはダンジョンに関する情報が必要だな。ダンジョンを見てきた人は情報を提供してください」

かくして、ダンジョンの情報が交換され、それをもとにメンバーを決定、裕達が既にボスを倒していることも知らずに、ダンジョンの攻略組が結成され、その日のうちにダンジョンの攻略と、情報収集が始まった。

翌日、起きて食堂にやってきた柳は、いつものように食事と生産の並行作業を始めようとして、自分を呼ぶ声を聞いた。

「あつ、柳」

こんな呼び方をするのは、香苗しかない。柳は混雑している人混みの中から、声の主を探して視線を彷徨わせる。

「おはよう、柳」

いつの間にか食事の乗ったトレーを持って、柳のすぐ近くまで来ていた香苗は、そのまま柳が一人で独占していた三人がけのテーブルの空いた席に座った。

「おはよう」

柳は短く返して、手元の鉱石を引っ込めた。以前から食事中くらい生産なんて忘れろと香苗に言われていたのだ。それを無視すると、香苗はすこぶる不機嫌になる。

何気なく柳が鉱石を仕舞ったのを確認して、香苗は何もなかったかのように話し始める。

「そういえば柳も昨日いなかったでしょ。さてはマスターと一緒にダンジョンに潜り込んでいたな？」

「まあ、そうだね」

「ということはもうマスターも戻ってきているよね」

「ああ」

「そつかあ、だったら速く皆に知らせた方がいいと思うんだけどなあ。昨日大変だったんだよ。マスターがいないっていうんで、みんなで会議開いたりして」

「マスターはまだ寝てるけど」

「まあ、いいや、食事が終わったらどうにかしよう。うん」

「いいのか……」

「それはそうと、柳達の方は、ダンジョンの攻略、どのくらいまで進んだの？」

「ボスを一体倒した」

「えっ、じゃあ、もう攻略し終わったっていうこと？」

「途中に別の道があったから……、多分レベルの低い奴がもう一体いると思う」

「でもメインは倒したんだ……、流石にマスターに柳に、主力メンバーは違うわね。私達はコウモリに対処できなくて全然進まなかったのに。でもいつごろ倒したの？」

「……三時を過ぎたあたり」

「そっか、私達が丁度会議していた頃か、それで誰もマスターの帰りに気がつかなかったのね……」

その後も昨日のことを香苗が話すのを、柳は食事の手を止めることなく聞いていた。

柳が先に食事を終えて、「マスターを起こしてくる」と言っただけで立ち上がった。ダンジョンの攻略に言っているのなら、早めにコウモリ対策の方法を知らせねば、万一無理をして被害が出たりしたら大変だ。

そうならないためにも、まずは裕を起こして皆にこのことを伝えて貰わねば。メールが一切使えないことは気が付いていたので、速足で廊下を歩き、裕の部屋の前に来ると、部屋に付いているインターホンを押した。

「誰かな」

「柳です」

「そっか」

短い会話の後、部屋の扉が開いた。今起きたばかりですと言った感じの、いつもののが感じられない裕の様子を木にすることもなく、柳は要件を伝える。

「なんかマスターがいなかったせいで色々大変みたいですよ」

詳しい説明はする気にならない柳が、必要最低限のことを伝える。「そっか」

寝起きなせいか、柳よりも口数の少ない裕は、それでもすぐに状況を予想して、動き出す。

「報告ご苦労。後は僕がどうにかするよ」

そう言って戸を閉めた。流石に寝間着姿で行くわけにもいかない。

素早く顔を洗い、目を覚ます。

「僕がいない間になんかあったみたいだな」

そう当たりをつけ、部屋から出て適当に人を捕まえる。

「あれ、あんた青空のリーダーじゃなかったか」

どうやら傭兵の一人らしい。

「ええ、そうですよ。ところで少し聞きたいのですが、僕達がいな
い間に何かありましたか」

「ああ、お前さんがいないってんで、みんな探しておったってえの
が一つ。あとは、なんでも船に乗っているNPCが不穏な発言をし
ているってえことが色々と騒ぎになってな。俺も確かめたが、あり
やどう見ても何か厄介なイベントを暗示しているだろうな」

「そうだったんですか……、では一度全員集めた方がよさそうです
ね。少し手伝ってくれませんか」

そう言つて、裕は船に乗る人を集め、ダンジョンの攻略を一時中
断させ、情報を集めた。

リーダーも戻つていよいよ本格的にイベントに対する対策が練ら
れ出したのは、船が島まで航路の半分以上を進んだ時のことであつ
た。

果てしなく広がる仮想の海に、ぽつりと浮かぶ一隻の船。抗えな
い潮にのり、目的の島まで着実に近づいていく……。

六話（後書き）

ちょっと忙しいので、次の更新は少し開きます。

七話（前書き）

しばらく更新があいた反動か、長くなっております。

ここからはこーし話が重くなってゆく予定です。

七話

裕が事態を把握したのが島に到着する前日の朝、その後再び会議が行われ、今度は裕が主導のもと、対策が練られた。

船底のダンジョンの攻略は一気に進み、裕達が行かなかった道が徹底的に調べられた。

対するに情報収集は思うように進まず、最後の一日でも新たな情報を得られなかった。

そして何事も起こらないまま、船は島へと到着した……

「何はともあれ到着したな……」

ギルドのメンバー数人を船で待機させ、裕は一人呟いた。

船の二階からワープで栈橋へと降り立ち、素早く辺りの状況を確認する。

木で造られた普遍的な栈橋。その向こうに広がるのはごつごつした岩場と、見渡す限り広がる大きな森。

「これといった危険はなさそうかな」

周囲の安全を確認し、ギルドのメンバーが降りてくるのをぼんやりと眺めていた。

最後に殿を務めていた大和が降りてきたのを確認し、裕はメンバーに集合を呼び掛ける。

ぞろぞろと、メンバーが手ごろな足場を探して岩の上を歩きまわる。全体の半数がいまだ栈橋を歩いているさなかという状況で、事件は起きた。

「スゴゴゴゴオオオオ」

突然激しい地鳴りがしたと思うと、震度六は軽いだろうという勢いの地震が起こった。

人々はまともに立つことすら難しく、足場の悪い岩場で転んだり、

ひどい者は海に転落してしまった。

「何なんだっ！」

その叫びに応えるかのように、森の方で変化があった。

突然盛り上がる地面。無数にある木々の一部が、土地の隆起によってなぎ倒された。

「なんで、いきなり地面が……」

岩に這いつくばったまま誰かが呟くのとほぼ同時に、それは姿を現した。

地面からはい出してきた優に五メートルは超える土の巨人。体中から木の根や落ち葉やら枯れ木やらが飛び出し、人型をとったその化け物に、顔はなかった。ただ、とにかくでかかった。

「何だあれ……」

またもや誰かの呟きに応えるかのように、土の巨人の顔に該当する部分が上下にばつくりと引き裂かれ、まるでそれが口であるかのような動きをして、くぐもった低い声を発した。

「訪れし人間どもよ……」

「え、嘘……、喋ってる」

誰かの驚愕の声も気にすることなく、土の巨人はなおも言葉を発する。

「残念なことにそなたたちはこの島から出ることができない」

「いや、予想はしてたけどそりゃあんまりだろ」

誰かの突っ込みも気に留めず、巨人の顔面の裂け目は開いたり閉じたりを繰り返す。

「それも全てはお主たちの後方、はるかに広がる海に住む精霊、海の精が原因だ」

腹の底へと響くような土の巨人の声は、島を訪れた者たちに深い不安を与えた。

「奴が海を荒らし、航路を妨げるがゆえに、船はお主たちを安全に運ぶことはできぬだろう」

いやな予感が当たってしまった。この場にいる誰もがそう思った

だろう。

「無事に故郷に帰るための方法はただ一つ。海を荒らす元凶を、海の精を討伐する事だ」

人々は今しがた船で渡ってきた海を振り返った。それを見計らったように、またもや異変が起こる。

「ズザザザザザザアア」

今度は海が、先ほどまでは大人しかった海に、いくつもの渦が発生し、船を巻き込まないギリギリのところで、海が盛り上がった。土の巨人が現れたときのように。

「今度は何だあ」

律義にリアクションをとる人々とタイミングを合わせるようにして、土の巨人に対抗するかのようになり、今度は水の巨人が現れた。

土の巨人同様、五メートルを超える身長、何もない顔。さすがに体中から魚の残骸が飛び出していることはなかったが、明らかに土の巨人と同類の、水の巨人が、海の上に立っていた。

「あんなのに勝てるわけねえだろ……」

誰かが呟いた通り、誰がどう見たって、戦って勝てる相手ではなさそうである。

そして水の巨人も、顔の部分を構成する水が二つに分かれて、喋り始めた。

「人間よ、その土の化け物の言うことに耳を貸してはなりません。奴こそは、この大きな島で好き放題に暴れまわり、モンスターをその懷で養い、人が住めない最低の島にしている元凶です。倒すのなら奴を倒しなさい。奴——土の精を倒すことができれば、あなた方はこの島で、豊富な食料をとり、安全で豊かな暮らしを営むことができるのです。逆にいえば、奴がいる限りあなた方がこの島で平和に生活することはできません」

結局どっちなんだ……。どちらを倒せばいいのか、いよいよもってわからなくなった人々は、二匹の巨人——もとい二匹の精霊を交互に見た。しかしどちらもこれ以上しゃべることはないのか、

徐々に形を崩し始めた。

ゆったり五分ほどかけて、二匹の精霊はすっかり形を失い、そこにいた痕跡さえすっかりと消えてしまった。

「……………どうしたものかな」

裕が困ったように呟いた。

その後緊急会議を開いた裕たちは、白熱した議論を交わしていた。
「もちろん海の精を倒すべきだろう」

一人のやや年老いたプレイヤーが、唾を飛ばしながら主張する。

「まずは少しでも早く帰って、戦力を整えてから土の精を倒せばよいではないか」

「しかし、それでは何のために情報をギルド内だけに抑えてやってきたのかわからないじゃないですか」

年若いプレイヤーが立ちあがって意見する。

「しかし先に海の精を倒すにしても、あっちと戦うには海に行くしかないじゃないか。どう考えたってあっちの方が苦戦するだろう。」

それなら少しは楽に戦えそうな土の精で腕慣らしをすべきでは？」

「何を根拠に海の精の方が難しいというんですかつ、そんなの強さは均等になるようになっていくに決まっているじゃないですか」

「自分のメニューを開いてみるよ。自動で新しいクエストが登録されているぞ。それを見たら海の精の討伐はレベル五、土の精の討伐はレベル四に設定されているじゃないか。それはつまり海の精の方が倒しづらいということだろう」

「しかし、帰還を優先にするのは当然の判断だろう。多少無理をしてもさっさと帰れる方がいいに決まっている」

「一体どこのゲームの理論だそれは。一回死んだらゲームオーバーなんだぞ。戻れないのくらい我慢しろよ」

「でも……………」

議論は一向にまとまる様子を見せなかった。居心地の悪い岩場で、数十名の代表者が話し合っているのだが、意見が割れるわれること。

どうしようか裕が決めかねていると、突然、喧騒が聞こえてきた。

音の方を見ると、サイの様な形をしたモンスターが襲いかかっていた。裕の視界に移ったレベル表示は二十五。それと戦っているのは、レベル二十のプレイヤー。

「誰か、援護しろっ」

裕が叫ぶよりも前に、何人かは走り出していた。

槍使いのレベル二十八の少年が、最初のプレイヤーに代わって何とかモンスターを仕留めた。

「レベルが高いな……」

裕は焦りを覚えた。今回の遠征は最低レベルは十五で組んでいる。レベル二十五のモンスターに不意打ちを食らえば、致命傷になりかねない。

「マスターっ！」

突然、棧橋の方から裕を呼ぶ声がした。

「どうした」

「船の中に、モンスターが」

「ダンジョン以外でも？」

「そうです。船のあちこちで、レベル十から二十八のモンスターが十から二十八！？なんでそんなにまちまちなんだ……」

「そんなこと言われましても……、俺は知りませんよ」

「とにかく、弱い奴はレベルの高い奴の近くに居るようにしろ。レベルの高い奴は弱い奴を何が何でも守れ」

裕はすぐさま周りのプレイヤーに指示を出し、全員の安全を図るようにした。

船が安全でないとすると、安全なエリアは全くないことになる。日が暮れるまでに安全なエリアを見つけないことには、夜もまともに寝られなくなる可能性がある。さらに船ではレベル二十八までのモンスターが出たという。となると島のどこでも似たような状況である可能性が高い。

「よし、安全なエリアを探そう」

裕は何とかプレイヤー全員に指示を出し、船に残っていた人も含めて島の探索に当たることにした。

五百名のプレイヤーの中から、レベルが高い戦闘職の人をいくらか選抜し、六つのグループに分けてマッピングを始めさせた。残りの人は、森の中に手ごろな空き地があったので、そこに集めて、何人も戦闘職のプレイヤーで守っている。

柳もその中の一人である。常に目を凝らしながら、モンスターが襲ってこないか確認している。

.....
終始無言の柳。

「疲れませんか」

「！」

急に背後から声をかけられて、柳は抜剣しながら振り返った。

「取って食べたりしませんから、落ち着いてください」

そこにいたのは妊だった。

「驚かすなよ.....」

「いや失礼、あまりに殺気立っているもので、真正面から話しかける気にならなかったもので」

「だからって背後に忍び寄る必要があるのか.....」

「それはともかく、少しは気を抜いた方がいいんじゃないですか？
ずっと気を張っていたら持ちませんよ」

「油断できる状況じゃない」

「大丈夫ですよ。柳さんほどのレベルなら」

「.....どうかな」

「ところでこんなところで喋っていていいのですか？」

「.....？」

「あちらの方が苦戦されていますよ」

妊がさし示した先には、両手持ちの剣を必死に振るって、現れた土の人形の様な形をしたモンスターと戦っている青年の姿があった。

それを見るや否や、柳は駆け出した。

敵の名前を確認すると、土の精の僕しもへとなっていた。動きはゆったりしているように見えるが、腕が伸び縮みするらしい。間合いが計りにくく、戦いづらい。

しかしレベルは二十。柳の敵ではなかった。苦戦している青年の前に無理やり割り込んで、柳はあつという間に敵を倒した。

一息ついて元いた位置に戻ると、姪が笑顔で待っていた。

「ちゃんと周りに気を配っていないと駄目ですよ」

柳が油断する大元を作った張本人が、当然のようにそんなことをのたまった。

「あ、柳、無事？」

少し離れたところから香苗の声がした。

「……無事」

「ま、そりゃそつか。柳だもんね。私なんか一対一でも泥人形に勝てる気からがしないよ。たまにレベル二十代後半のとかでてるんだもん」

「まあ」

「それより柳はどう思う？土の精と海の精、どっちから倒すべきだと思う」

「どっちでも構わない」

「そつか……、でもこのまま街とか見つからなかったら、ずっと危険地帯で過ごさなきゃならないんだよ。それは何というか、疲れるというか……」

「香苗は……、海の精から倒したいのか？」

「うーん、私はそうだね……、やっぱり早いところ安全地帯に戻りたいな」

「そつか……」

ここで初めて柳はどちらから倒したいか考え始めた。

柳のアイテムのストックは確実に減ってゆく。都合のよいアイテムショップでも見つからない限り、柳は前半型、先に土の精から倒

したら海の精とともに戦えなくなる可能性はある。

しかし、海の精から倒してしまうと、大陸にいる人々もこの島に訪れることができるようになるだろう。そうなれば、何のためにギルド内で情報を隠してここにやってきたのか分からなくなる。やはり大勢で分けるよりは、今いる五百人でアイテムを分けた方がまだよいだろう。

少し考えて、でもやっぱりどちらでもいいかと結論づけて、柳は考えを打ち切った。

いつの間にか、姪はいなくなっていた。

島の探索に行った人々が戻ってきたのは、日が沈みかけた頃、メニールウインドウに表示される時計が午後の六時を指し、仮想の気温が10　まで下がった頃だった。

最初、裕が指揮を執っていたグループが帰ってきて、安全地帯がなかったことを告げた後、残りの五グループ全てが続いて帰還した。どこのグループも安全地帯の発見はできなかった。

「悲しいお知らせがある」

全員が戻ってきた後の裕の第一声がこれである。

「『青空』のメンバーの一人が、レベル三十のモンスターに遭遇、『死亡』した」

辺りが静まり返った。

復活の存在しないこの世界では、プレイヤーの死亡は、この世界では二度と会えないことを意味している。だからこそ、誰もが慎重にプレイし、ライフが半分にまで減れば、回復を最優先に考えるというのが一般的だ。今回『死亡』したプレイヤーとて、十分死亡には気をつけていた。しかしそれでも、相手のレベルがあまりに高く、戦闘からの離脱が間に合わなかったのだと裕は説明した。

「皆もこの島にいる間は、自分のライフに最大限注意を払ってもらいたい。敵のレベルはまちまちで、一発ごとのダメージが予想しに

くい。ライフが七割を切ったら、すぐに回復するように心がけてくれ」

裕は皆に注意を促しながら、自分も決して油断できないなと齒噛みする。裕のレベルは柳や大和のように高くはない。彼らと一緒にいると、つい勘違いしがちだが、レベル三十の敵といえば、裕にとつては十分強敵にカテゴリされる。ともすれば一対一でも、油断すれば負け得るということを再確認した。

探索に行ったメンバーの簡単な報告と、マップの共有を行った後、裕たちは野営の準備に入った。

安全地帯が見つからない以上、見張りを立てて睡眠をとるしかない。大人数が固まって寝られるよう、広い空き地を探し、それでも五百人が同時に寝ることはできそうもないので、いくつかに分けて寝床を確保、食事の準備に入ることにした。

いくらかの保存食は持ち込んでいるが、それはなるべく取っておきたいので、可能な限り食事はモンスターのドロップ品で補いたい。幸い、最初に襲ってきたサイの様なモンスターが、食肉をドロップするのと、そこらじゅうに生えている草の中から、姪が鑑定して食べられると判断した植物が食べることができた。

なるべく高レベルプレイヤーが食事を集め、モンスターに襲われても対処できるようにしたのだが、如何せん、それだと効率が著しく落ちる。

結局、集めた食料は、調理して全員に分配すると微々たる量にしかならず、人によつては自分で食料を調達したり、持ってきた食料を出したりして、腹を満たすものが多かった。

「柳君、君は本気でそれを食べる気かい？」

裕は柳が手にしているただ火であぶっただけのモンスターの肉と、明らかに生のままの植物を見て声をかけた。

「料理スキルはあまり伸ばしていないので」

料理は、生産とほぼ同様のプロセスで行うことができる。その場合、料理スキルの練度によってできることが変わってくるのだが、

柳の肉は明らかに、レベル10未満で調理されたもの、『加熱』の料理スキルは最大百レベルまで上がることを考えると、ほぼ最低クラスのものだった。肉の真ん中らへんは火が通っていないに違いない。裕が見かねて、柳の代わりに調理してやろうかと考えていると、裕よりも適任な人が現れた。

「ちよつ、柳つ、何それ、本当に人間の食い物？」

慌てて走ってきたのは、香苗である。女性は大抵料理スキルを伸ばしている^{解毒}と信じている裕は、柳の肉の調理を任せることにした。

「食えれば何でもいいだろ」

柳がぼそつと呟いていたが、それを無視して、香苗が柳の肉を取り上げた。

メニユーウィンドウを手際よく操作して、香苗は肉の加工を開始する。

柳が中途半端に熱したせいで、まともな物は作れそうにないが、香苗は何とかして、シチューもどきを作ることに成功した。加熱はおろか調理自体まったくされていなかった『柳の植物』も入れている。

「おお、さすがに女性の料理はレベルが高いですね。よろしければ私たちの分も作っていただけませんか？」

どこからともなくひよっこり現れた妊が、ちゃっかりと自分の食材と、裕が自分で調理しようとしていた食材を奪って香苗に手渡す。

「えつと……、どちら様？」

香苗は突然現れた謎のヒーラーに若干引きぎみになりながらも、食材を受け取る。

「柳さんの友人です」

勝手に友人ということにして、妊はにつこりとほほ笑んでいる。

「そ、そうですか……、なんか以外というか、柳に友人がいること自体びっくりというか……」

香苗は何かをぶつぶつ呟きながら、手早く調理を続ける。

料理スキルの練度だけでいえば、実は妊も香苗と同じくらい高い

のだが、やはり料理の発想というか、調理の仕方において、香苗の方が上だった。

柳のシチューもどきよりもさらにおいしそうに出来上がった、本物のシチューは、冷え込んできた大気にもくもくと白い湯気を上げ、盛られた器から手にほんのりと温かみが伝わってきた。

「ではいただきます」

「いただきます」

姪と裕はメニューウィンドウを操作してサバイバルキットバージョン5から、『サバイバルスプーン』を取り出し、シチューを食べ始めた。柳も黙々と食べている。

香苗も自分の分をささつと作り、食べ始めた。

時折現れるモンスターは、交代制で討伐し、当番外の人に食事を食べ、テントを張り、この、『未開の島』での体制を整えた。

いつか落ち着いた宿で再び食事が取れることを祈り、明日も無事に生き抜くことを祈り、人々はテントへと入って行った。

八話（前書き）

冬休みが終わってしまったので更新はゆっくりペースになります。

八話

島にやってきて早四日。毎日島の探索を進めているのだが、安全エリアは見つかる気配すらない。代わりに、いくつかのことが分かった。

まず第一に、モンスターの種類がおよそ判明。サイミたいな姿をしたモンスターの名は、『リノウス』。こいつは攻撃が単調なので、落ち着いて戦えば、さほど怖くはない。

逆に厄介なのが、『土の精の僕』。いつの間にか『泥人形』という愛称が定着したこいつは、人型で、ゆえに攻撃のバリエーションが多い。

その他、場所によってはさまざまなモンスターが発見されたが、その中でも重要なのは、『魔キノコ』というモンスター。強さとしては、レベルさえ高くなければ脅威にはならないモンスターなのが、こいつを倒すと落とすアイテムの中に、まれに、レアアイテムの『転移魔方陣』が含まれることがわかったのだ。尤も、そのドロップ率は極めて低く、今のところたった一度それをドロップしたのが確認されただけで、どのくらいの確率でドロップするのかは明らかになっていない。

船底のダンジョンのボスであった、『パイレートゴースト』も落としたこのアイテムは、自分が行ったことのある町のセーブポイントに、一瞬で転移する非常に便利なアイテムなのだが、めったに手に入らないうえに、一度使うと無くなってしまうので、ものすごい希少価値がある。加えて、いつ帰れるかわからないこの状況。この島にいるプレイヤーにとって、無条件で大陸に戻るのアイテムというのは、のどから手が出るほどほしいものだった。

「どうしたものかな……」

しかしまさに今、そのことによって頭を抱える人物がいた。裕である。

「さすがに五百人をいつぺんにまとめるのは困難か。ならばせめてこれ以上の分裂を阻止しなければ……」

この島から脱出することが出来るアイテムの存在によって、ある程度レベルの高いプレイヤーが、キノコ狩りと称して、島の探索から抜け、魔キノコの集中討伐を始めたのである。これによって、島の探索が思うように行かなくなったのは言うまでもない。

さらに他の問題も発生している。

食料難である。

そこそこレベルの高いプレイヤーがキノコ狩りでごっそりと抜けてしまったために、食料の採取も思うように行かなくなったのである。一度船に戻って食料を大量購入したが、何とあつという間に在庫切れを起こし、最初の二日ですっかり無くなってしまったのである。

保存食の類も、持ってきている量には個人差があるし、レベルの低いプレイヤーは特に、大量の食料を用意できなかった者が多く、さらにそのレベルゆえにうかつに食料採取に赴くことができない。低レベルプレイヤーを守りながら、高レベルプレイヤーが食料を採取しているが、キノコ狩りに向かったプレイヤーの分を引いても四百人はいるプレイヤーを養うほどの量はとることができなかった。さらに高レベルプレイヤーは働きづめで、そろそろ限界が近いという問題も発生している。

島の探索を進めても、おそらく安全地帯は見つからないだろうという意見が大半を占める今、島の探索をいったん止めて食料採集に力を入れたいところだが、それをやっても、その場しのぎにすぎない。海の精討伐を主張する帰還派の動きも強まってきたので、裕の胃は痛みっぱなしである。

「どうしたものかな……」

今日何度目かわからない呟きを裕が吐いたのとは同時に、裕を呼ぶ声がした。

「マスター、大変です」

「またか。今度はどうした」

もうつんざりですといった調子で振り返った裕に、走ってきた少女はまくしたてる。

「帰還派がこちらから完全に独立して行動すると言い出して、現在広場でメンバーを募っています」

「それに同調しているのはどれくらいいる」

「以前から帰還派だったプレイヤーも含めて百人近くがそちらに着くことを表明して、さらに人数は膨れ上がっていました。私の見立てでは最終的には二百人くらいにはなるかと」

「メンバーの構成は？戦力になる人間はどれくらい混ざっている？生産系は？」

「戦力になりそうなのは以前から海の精討伐を主張していたメンバー、およそ二十人に加えて、傭兵系の連中が十人くらい、その他にも十人は混ざっていました。レベル三十を超えるものも何人かはそちらに着くようです。生産系は……、すみません。よくわかりません」

「そうか……、まあ、でも非戦闘系も五十人以上はそちらに持って行ってくれるようだ。今の状況だったらかえって人数が減った方が動きやすいかもしれない。下手に引きとめて内部で亀裂を広げるような真似はしない方がいいだろう」

「そうですか……」

裕が疲れたようにそう言うと、少女はすぐごと引き下がっていった。

「どうしたものかな……」

げっそりとそんなことを呟いて、裕は立ち上がった。

「あ、柳、なんか大変なことになってるみたいよ」

片手で生産を行いながら、食料調達に行こうと野営地を出ようとしていた柳を、香苗が呼びとめた。

「何が？」

「なんだか帰還派の人たちがメンバーを募って、独自に行動するか言って、あっちの方で騒ぎになっているみたい」

「……そうか。見に行くか？」

よもや柳が自分からどこかに行くのに誰かを連れて行こうとするなど、思ってもみなかった香苗は、三秒ほど固まったのち、何とか現世に復帰して、答えた。

「うん」

「……………というわけだ。我らに加わるものは二時にあちら側——野営地の東端に集合だ。すでに百五十を超える人間が参加を表明している。安心してほしい。こちらにはすでに十分戦闘能力のある人間が集まっている」

野営地の中央付近で、外見年齢二十四・五歳の男が、声高に演説している。

彼自身、なかなかの実力があるようで、レベルが三十を超えている。

彼の周囲には、数多くの人が集まり、しきりに悩んだり、自分はいこちに着くぞとアピールしたり、とにかく騒がしかった。どうやら別のところに野営している人々も集まってきているようだ。

「とうとう帰還派が動き出したかあ、マスターも大変だろうな……………」

香苗がどこかでぐったりしているだろう裕を思ってしまった。

「香苗は……………」

柳がぼそつと言った。

「うん？」

「あっち帰還派に行かないのか？」

「……………は？」

時間が止まったかのように、香苗が固まった。

「……………あっちに行つてほしいわけ？」

香苗が低く、小さい声で訊いた。

柳たちの会話の一部始終を聞いていた周囲の人々は、空間が軋ん

だかのような錯覚に陥った。中にはすぐさまその場の離脱を図った者までいたほどだ。

しかし当の柳は空気の変化に全く気が付いていない。……空気の読めないやつである。

「いや、別にどっちでもいいんだけど」

加えて柳の余計な発言。これなら黙っていた方がましである。

「……もったいない」

香苗はすさまじい怒気を発しながら、どこかへ歩き去ってしまった。

柳のあんまりな言い草に腹を立てた香苗は、特に目的もなく、草地をずんずん歩いて行った。

「なにもあんな風に言わなくてもいいじゃない」

時折、柳に対して文句が口からこぼれる。

別に柳に悪気がないのはわかる。少し冷静になってみれば、柳が、香苗が以前、先に海の精から倒したいと言っていたことを気にしてああいう風に言ったのはわかった。しかし、それにしても、もっとましな言い方はできないのだろうか。あれではまるで、香苗をささと厄介払いしようとしているみたいではないか。

「なんであいつはこんなに入付き合いが悪いのよ」

今まで溜まっていた鬱憤が、思わず口をついてでくる。

或いは立て続けの野営で、ストレスが溜まっていたのかもしれない。

香苗はイライラを持て余して、やみくもにただ歩いていた。

いつの間にか野営地を抜けてしまっていたらしい。

香苗はモンスターが徘徊していることに気が付き、しかし引き返すのも癪だったので、ざっと周囲を見回して安全な場所を探した。

香苗の職業はレンジャーである。高い脚力を持ち、ちょうど今いる森のような、たくさんの障害物があるところでこそその真価を発揮する。

香苗のレベルでは、この島でのモンスターとの直接戦闘は非常に危険である。柳たちよりはるかにレベルが低く、レベル三十にすら至っていない。普段なら、一人でこのような危険地帯をうろつくような真似は決してしなかった。しかし今は、とにかくイライラしていた。とにかくこのストレスを発散したくて、香苗は引き返すことをしなかった。

しかし香苗の視界には、レベル不明のモンスターが何匹もいる。レベル不明のリノウスの攻撃をクリティカルで受けたら、下手をすれば一撃でやられかねない。

香苗の判別スキルは低いため、自分よりややレベルの低いモンスターしかレベルが判別できない。いくらイライラしているとはいえ、さすがに自分よりレベルの高いモンスターを相手取るのは危険すぎる。しかも奴らの索敵範囲は存外に広い。香苗はモンスターの索敵範囲に引つかかるギリギリ前に、丁度よい木を見つけ、そこに登って身を隠した。木登りはレンジャーの専売特許である。

木に茂る大量の葉っぱに身を隠した香苗は、背負った弓を手に取り、弓掛けをはめ、矢筒から矢を引き抜き、弓に番える。

本来なら、そのまま隠れているべきであろう。しかし今の香苗は少しばかり冷静さに欠けている。

現実世界で弓道をやっていた香苗は、弓の扱いには自信がある。荒れる心を無理やり落ち着かせ、ゆっくりと弓を引き絞っていく。狙いはたまたま目についた土の精の僕。距離はさほど離れていない。首と胴体の繋ぎ目、クリティカルポイントをはたと見据え、矢を放つ。

弧を描いて飛んだ矢は、狙い過たず泥人形の首に吸い込まれる。クリティカルヒット。

突然索敵範囲外から攻撃を受けた泥人形は、クリティカルの攻撃を受けたことよって大量のライフを失いながら、標的を探す。その何もない顔に目が付いているかのように、その顔は香苗を見据えた。

香苗が今度は素早く次の矢を番えているすきに、泥人形は走り出した。木に登ってくるつもりか。

香苗はほとんど無意識に弦を引き絞り、二発目を放つ。

今度は敵も動いていたので、クリティカルにはならなかったが、矢はしっかりと泥人形の胴体を捉えていた。それでも泥人形はひるむことなく、香苗のいる気に向かってかけてくる。

登れるのだろうか？

ふとそんな疑問が香苗の頭をよぎったが、泥人形が何の勝算もなしにこちらに向かってくるとも思えない。モンスターの行動パターンのプログラムは、驚くほど優秀なのだ。

香苗はレンジャーの特性を生かして、器用に枝の上を渡り、枝が絡まりあっていた隣の木に飛び移った。泥人形は少し前まで香苗がいた木に激突し、その木を盛大に揺らしたが、香苗が飛び移った木は少ししか揺れなかった。

三つ目の矢を番え、弦を引き絞る。土の精の僕が香苗が座っている木の枝のほぼ真下に来た時に、矢を放つ。今度も命中。

武道が廃れてきた昨今において、香苗は十分優秀な弓の使い手だった（もちろんレベルアップによる筋力強化の恩恵は大きいが）。

三発目の矢をもらい、ライフをすっかり失って光となってゆく土の精の僕を見届け、香苗は次の標的を探す。

香苗はいやなことを頭から追い出そうと、ただひたすらに矢を放つ。

敵を倒す爽快感でもって、柳を頭から追い出す。^{ストレス}

香苗は何かに取りつかれたように、矢を放ち続けた。

今朝には千を超える本数の矢をストックしていた香苗の矢筒は、いつの間にか、残すところ二百本を切っていた。

アイテムの補充がままならない未開の島に来ていることも忘れ、

香苗は一心不乱に矢を放っていた。

八話（後書き）

漢字の間違いを修正しました。（気 木）

間違い多くてすみません。

九話（前書き）

ちょっと短いですが、きりがいいのでここで投稿しちゃいます。

九話

香苗が去った方向は森の中、大丈夫なのだろうか？柳は少し心配になったが、あの様子では自分が行ったら事態を悪化させかねないと思いなおし、再び演説を行っている帰還派の男性に目を向ける。

「薄情な人ですねえ」

そんな柳に、突然後ろから声をかける人間がいた。むろん妊である。

「……何が」

柳が多少むきになって聞いた。

「流石ですね。柳さん。普通は女性に逃げられたら、多少は動揺してもいいと思うんですけどねえ」

「……それで？」

「行かなくていいんですか？」

「どこに？」

「香苗さんのところですよ。彼女は一人で行ってしまいましたよ。」

香苗さんのレベルでは多少以上に危険だと思いますが」

「そんな無鉄砲なことをするかな？」

「彼女は柳さんとは違いますからね、あんな風に言われたら動揺もしますよ。それに彼女は動揺すると、よく我を忘れますからねえ。」

我を忘れたときの彼女は、しばしば命をお粗末にしますから」

「……そうなのか？」

「そうですよ」

「……なぜ俺が行かなきゃならない」

「そもそもの原因はあなたです。ぐずぐず言っていないで探してきなさい」

「……はい」

妊の押しの強さに負けて、柳はしぶしぶと香苗が向かった方に歩き始めた。

「走った方がいいと思いますよ」

柳はやれやれといった感じで、加速した。レベル上昇により、脚力はすでに人間離れしているが、そもそもレンジャーの脚力はやたらと高い。しかも柳は決して走るのが得意な方ではないので、筋力を十分には使いこなせていない。香苗を見つけるのには時間がかかりそうだと、柳はうんざりしながら足を速めた。

香苗が我に返ったのは、彼女の矢が、誤ってレベル三十を明らかに超えている泥人形に突き刺さった時だった。

加熱していた思考が、一気に冷え込み、すぐさま現状のまずさに気がつく。

レベル不明の泥人形は、明らかに先ほどまで香苗が射っていた泥人形たちよりも速い動きで、香苗の登っている木に走りこんで来る。あせった香苗は、わずかに反応が遅れ、隣の木に飛び移るのが間に合わなかった。

泥人形が、すさまじい跳躍を見せ、木の低いところにある枝に飛び乗った。衝撃が香苗の乗っている枝にまで伝わってきて、香苗のバランスを崩す。しかしレンジャーたるもの、そのままあっさりと墜落するわけにはいかない。香苗は何とかバランスを立て直し、しっかりと両足で枝を捉え、泥人形を見据えた。

と思ったら、泥人形はすでに香苗の目の前まで迫っていた。

泥人形の腕が勢いよく振り上げられ、香苗の腹に突き刺さる。見事に鳩尾に当たっていた。大量のライフが失われる。それと同時に、今度こそバランスを崩した香苗が、足場を失った。

二メートル以上の高さから、香苗の体が真っ直ぐに落ちてゆく。

地面に激突したことで、さらに大量のライフが失われる。この時点で、香苗のライフは七割を切ってしまった。さらに、泥人形が木の上から飛び込んできた。明らかに捨て身の攻撃だが、重力の加速を受けた攻撃を受ければ、致命的なダメージになるだろう。香苗は何とか回避すべく、落下の衝撃による硬直を振り払って横に転がっ

た。

しかし泥人形は人間ではない。こいつは平気で体の一部を取り外せるのだ。何と泥人形は、香苗が攻撃範囲から逃れたと見るや、空中で腕を外し、香苗めがけて投げつけた。

妙に密度の高い泥人形の腕は、重力の加速を受けて威力を増して、香苗に直撃した。またしてもライフが光の粉となって舞い散った。

「う……」

香苗はうめき声を上げながらも、急いで泥人形と距離をとる。そこで香苗は自分の失態に気がついた。

他の敵キャラ、リノウスの索敵範囲に入ってしまったのである。

サイ型の巨体は、視界に香苗を捉えるや、すぐさま突進の体制に入った。

香苗は泥人形を視界の中央に据えながらも、ほぼ真横から突進してくるリノウスに対処しなければいけなくなった。

幸いなことに、リノウスの戦闘用プログラムは、レベルが低く設定されているため、高度な作戦は取ってこない。泥人形との連携は心配する必要がないだろうが、それでも二匹を同時に相手取るのは、香苗には出来そうもなかった。

最初のリノウスの突進は、割と楽にかわすことが出来た。さらに通過するリノウスが、泥人形と香苗の間の壁となってくれたおかげで、泥人形からの攻撃を受けずに済んだ。そのすきに香苗は離脱を試みたが、そもそもリノウスは香苗よりもはるかに速いし、泥人形も意外とそこそ早い。香苗と同程度だろうか。

逃げる方の香苗は、常にリノウスの突進を意識しなければいけなかった。泥人形との距離は瞬く間に縮まり、香苗の離脱は失敗に終わった。

泥人形の的確な攻撃を、リノウスを意識しながらかわしきることは香苗には出来なかった。離脱もできず、戦って勝つこともできそうにない。香苗は弓を捨て、接近戦用の武器であるナイフを腰から外して戦った。

泥人形のライフはほとんど減ってゆかず、ただただ香苗のライフが減ってゆく。

このままでは「死亡」する。

その焦りがさらに香苗の動きから正確さを奪い、もともと接近戦が苦手な香苗の不利がさらに顕著になってゆく。

残りライフが一割を切ったところで、香苗の中にはあきらめの感情が浮かんできた。

——どうせ死ぬわけではない。

思考がどこまでも冷めてゆき、逆に思い切りが生まれてくる。

後、一撃。それだけ食らえば香苗のライフは無くなり、香苗のバターはこの世界から抹消され、香苗の意識は別の世界へとシフトする。

最後に目の前の憎い泥人形に一矢報いてやろうと、思い切り懐に潜り込んで横に蹴り飛ばし、突進してきたリノウスに激突させてやる。しかしそのままりノウスは勢いを殺すことなく突っ込んできて、香苗のライフを奪って——

——いかなかった。

香苗の目の前に転がるリノウスの巨体。

その横に立つのは——

「また柳に助けられちゃった」

果てしなく不機嫌な顔で剣を振りぬいた少年だった。

「……危なかった」

柳は肩を上下させながら、かがんでアイテムを回収した。

香苗は急いで回復アイテムであるポーションを取り出し、一気に飲み干した。

「ありがと、柳」

「なんでこんな自殺行為をしてるんだよ」

「……………」

香苗はひとつ溜息をつく、柳に言った。

「じゃ、戻ろうか」

柳達が野営地に戻ると、そこは驚くほど規模が縮小していた。

半径五十メートルはあった野営地には、百を超えるテントが乱立していたのだが、今やその見る影もなく、立っているテントの数は半分以上になり、それらが寄せ集まっていた。多分広いスペースを守りきることができなくなったのだろう。

「いつの間にやら随分な有様ね……」

香苗が淋しそうにつぶやいた。

柳は香苗が戻っていないか確認するために何度か戻ってきていたために、野営地が縮んだのは知っていたが、見るたびに虚しさがこみ上げてくる。

「お、柳君に香苗さんか、近郊のモンスターの討伐御苦労さま。無事で何よりだよ」

たまたま野営地の周りに現れるモンスターを狩っていた裕が声をかけた。

「近郊とは言い難いほど遠くまで行ってきましたけどね」

柳がぼそつと皮肉めいたことを言ったが、香苗は聞こえなかったことにした。

「マスター、一体どうしたらこんな事になってしまったんですか」

「帰還派のメンバーが我々から離れることを宣言してね。何所か別のところに野営地を構えることにしたらしい。さらに他にも行動派なる組織が突然形成されてね、実力者がごっそりとそちらにとられてしまったのだよ。おかげで残念ながら我々の規模は著しく低下してしまっただ」

裕はさらりと言つてのけたが、実際のところ、裕達『正統派』の規模は著しく低下し、食料の調達はおろか、野営地の防衛すら厳しくなってしまうていた。そのため、裕のようなある程度実力のある者はほとんど休みなしで野営地の防衛にあたらざるを得なくなっているのである。

「ということだから、早速だが、二人とも、野営地の防衛を手伝ってくれ。もうしばらくしたら他の場所に野営地を張っているメンバーもやってくるはずだから、それまで守り抜けば、もう少し行動が楽になると思うからね」

柳達はしばらく勝手に野営地から抜けていた後ろめたさもあり、すぐに野営地の防衛を始めた。

香苗は、自分が未だに昼食すらとっていないことを思い出して、見張りをしながらも簡単な昼食を食べることにした。いずれにせよ、香苗は単独では戦闘していない。ただでさえレベルが低いのに、主力武器である弓を捨ててしまったために、戦力が低下しているのだ。幸い、食材は先程までの戦いで、大量に手に入れていた。我を忘れても、しっかりとアイテムの回収は行っていたらしい。

アイテムを整理して、食材アイテムを適当に選ばうとして、香苗はとんでもないものを見た。

「え、なんでこれが私のインベントリに？」

香苗の視線の先には、所有アイテム欄に一つのアイテム名が記載されていた。

『転移魔法陣』

レアアイテムを示す黄緑色の文字で記載されたそのアイテムは、今この状況で最も欲しいアイテムの一つ。今すぐ使えば、自分の身に降りかかる危険をかなり減らすことができる。既に、この島から転移魔法陣を使って脱出したプレイヤーは六人ほどいた。他にこの

島で、このアイテムを保持していると言われているのは、裕だけである。

香苗はしばし呆然とした後、カーソルを恐る恐る転移魔法陣に合わせ、選択。現れた選択肢の中から、『使う』を選択しようとして手を止めた。

結局、香苗はこの段階でこのアイテムを使うことをしなかった。改めて食材を探し、調理を開始する。見張りを続けながら、香苗は片手間でできるような簡単な食事を作る。

香苗は黙々と作業をしながらも、意識は何所か別のところにあった。

九話（後書き）

漢字の修正をしました。

毎度すみません。

十話（前書き）

数字の間違いを直しました。

「六十」↓「七十」

毎度毎度すみません

十話

島にやってきて一週間が経過しようとしていた。

特に高レベルプレイヤーは、低レベルプレイヤーの保護を行いながら探索を進め、食料の調達も行ったりと、疲労が著しく溜まり始めた。

一方、生産職系のプレイヤーは、島にあるアイテムの生産法がある程度確立し、生産自体は軌道に乗り始めた。

プレイヤーの分裂はさらに何度か起こり、今や最大規模を誇る裕たちの、『正統派』でさえ二百人を割っていた。

プレイヤーの『死亡』事件もすでに何度も起こっていた。中には、野営地の守備の穴を抜けたモンスターが野営地内のプレイヤーを『死亡』させるという事件も起こっていた。やはり分裂による穴は大きいのである。

「正統派からの死亡が五人、帰還派からは八人、行動派からは十三人か……」

今までに報告された死亡者数を数えて頭を抱える裕。最近彼の胃は痛みつぱなしである。すでに二十六にも上った死亡者数は、かつて最も『死亡者』を出したダンジョンの攻略のときに出た『死亡者』数にも匹敵しようとしていた。

「これ以上死亡者を出したくないが……、このまま疲労が溜まっていったら高レベルプレイヤーからも『死亡者』がたくさん出そうだな……」

裕が一人ぶつぶつと呟いていると、彼に近づいてくるプレイヤーがあつた。

「今すぐここを離れなさい」

全く感情の乗っていない声。NPCですらこれより遙かに感情表現ができているだろうという声で、その人物は唐突に野営地を解体することを要求してきた。

「なんでまた突然そんなことを言うのかな？」

裕がうんざりした調子で聞き返すと、その、二十歳くらいと思われる男性は表情一つ動かさずに答えた。

「このフィールドのボスモンスターがこの近くに出現する可能性が高い。よって危険を回避するために今すぐにここを離れなさい」

裕はあまりに突拍子もない話にしばし硬直を余儀なくされた。やがて裕の思考が活動を再開したところで、その男は続けて言った。

「このマップのボスはマップ内をランダムに徘徊する。ボスの活動開始は今から六時間と二十分八秒後。最初の出現位置はこの付近である可能性が高い」

一ミリも表情を動かすことなく、わずかに開いた口から奇怪な言葉を発する男性。裕はアホかと言いたいのを必死にこらえ、勤めて大人の対応をする。

「なんでそんなことが分かるのかな？」

「このマップ及びそれに付属するイベントを制作している人工知能（AI）はシステムの制御の一部を無効化してメインコンピュータの制御から離れて独自にシステム開発を行っている。このAIは島に進入したプレイヤーを全滅させようとする可能性が高い」

「なんでまたそんな突飛な話が出てくるんだね？」

「サーバの開発中に生成した開発補助のAIの内の一つが偶発的に人間が持つ感情に近いものを手に入れたためにシステムの制御を逃れて当時すでに完成していたマップの一つを占領した。メインコンピュータはそのAIとの接続を可能な限り遮断することによりAIによる他のマップの変更を防いだが同時に自分もそのマップに手を加えることができなくなった。しかしプレイヤーは条件を満たすことによってマップに進入できるため、あなたたちはこのマップ、つまり感情を持ったAIが支配した未開の島に進入することができた。私はメインコンピュータが生成し、プレイヤーの付加情報として侵入したNPCだ。しかしこの島に進入するにはこの島ができる以前からあったコモンイベントの形態をとらなければならなかったために活

動が制限されている。だからこのAIを強制的に破壊することができない。自由に活動できるあなたたちの協力が必要だ。手伝ってもらいたい。よってまずは生き延びてほしい」

自称NPCの男の長い話のほとんどは、裕の右耳から入って左耳に抜けて行った。明らかに裕の理解を超えた話だ。

「その話を信じられる要素がどこにもないのだが」

「証拠に今から発光イベントを起こす。私に注目しなさい」

そう言うなり、自称NPCは裕から一步離れた。裕が男の体を見ると、驚いたことに、本当に男の体がかすかに光っている。

「……どんなトリックだ？」

しかしいきなり光ったからといって、男がNPCであるということ自体信じることは難しかった。

「私はあなたの所持品情報に入っている。アイテムリストを見なさい。no.88969eというアイテムが入っているはずだ。それが私だ」

裕は言われたとおりにアイテム一覧を開き、五十音順にソートした。そして五十音以外の文字から始まるアイテム名を探す。

目的の物はすぐに見つかった。

廃棄不可能のアイテムに、no.88969eという物が確かにあった。説明文は一文字も入っていない。

「なるほど……、あながち嘘でもないということかな」

裕は内心の動揺を押し殺して言った。どんなトリックを使っても、他人のメニュー画面を操作するなどということはできるとは思えない。

「で、どこに逃げればいいのかな？」

「あなたの判断に任せる」

そういったつきりそのNPCはピクリとも動かない。裕はやれやれといった感じで、しばらく思索する。

北に逃げれば、上手くいけばそのまままだ攻略の手が届いていない場所にまでいける可能性はある。しかしまだ攻略していないと

ころまで、低レベルプレイヤーを連れていくのは危険だし、ボスから逃げるのなら地の利がないのは少々心もとない。そこまで考えて、裕の頭には一つの疑問が浮かんだ。

「しかし僕たちはどのみちボスとは戦わねばならない。ならば今戦ってはいけないのか？」

「ボスのレベル設定は各マップ制作のAIに委ねられている。おそらくAIはこのマップでのボスのレベル設定の上限値、レベル七十に設定しているだろう。あなたたちが束になったところで、勝てる見込みは極めて少ない」

「レベル七十で……、いままで僕たちが戦ったボスの最高レベルで確か四十五だったよね」

「その通り。あの戦いでさえあなた方は犠牲者を出した。このボスと戦って勝てる見込みはないだろう」

「……そうだろうね。しかしレベル七十か。ボスの情報をもう少しもらえないかな？」

「メインコンピュータの予測では、出現するボスはマップの自由移動が可能に設定されているはずだから、移動速度はそこまで上げられないものと思われる。島の端から端まで移動するには最低二日はかかるだろう。各種パラメータはレベルに応じて設定範囲に限界があるから、あくまでレベル七十の敵と見れば問題ないが、どちらにせよあなた方のパラメータよりはるかに高いし、ボスのパラメータ補正があるからあなた方は攻撃を一発食らうだけでも危険だと思われる。メインコンピュータが予想し得たのはここまでだ。ここからは私がこの島にやってきてから推測したことになるので若干正確性に欠けるのだが、おそらくボスの形態は最初、あなた方がこの島にやってきたときに見たあの形のままであろう。今まで何の活動もなかったのは、マップ自由移動型のボスに最初から制限が加えられていたからだから、今からきっかり六時間と十三分四十五秒後には、本気であなた方を倒しに来るだろう。ただ、あの巨体なら通常より多めにパラメータが振れる代わりに、目立つことは回避できな

い。こちらからは奴の位置は筒抜けになるだろうし、上手く逃げ回れば、ボスによる犠牲は出さずに済むだろう」

「しかしいま僕たちは分裂している。いま僕が動かせるのは正統派のプレイヤーだけだよ」

「他の者はこの際切り捨てるのが上策だろう。大人数でまとまった人間はえてして行動が遅くなる」

「そうあっさり切り捨てるわけにも行かないんだけどね」

「全滅を選ぶか、一部だけでも生き残るか、ただそれだけの選択だ」
「僕がリアルの世界で最も忌避したものが、まさかこの世界に来てまで出会うとはね」

そう言ったつきり裕はしばらく考え込んだが、結局最初から選択肢は一つしか用意されていなかった。多くの者を救う道があるのに、それを選ばないなんてことはできないものだ。

「仕方ないね。他の連中にはせめて警告だけでもしておくことしよう。そうするとやることはたくさんあるな」

「逃げ始める時間だが、ボスの初期出現位置は実際にボスが出現する六時間前には決めなくてはならない。しかしそれより前だと、AIが自由に出現位置を変更できる可能性が高い。あなたは今から十分ほどは、何も知らないふりをしておいた方がいいだろう。こちらがこの危険について知っていることがAIにばれれば、向こうはこちらの行動を予測し、こちらがこれから移動するであろう場所にボスを配置するだろう」

「それは随分と恐ろしい話だね。ところで、僕たちがこの島から出るには、水の精を倒さなければならないんだっただよ。あつちは、どのくらいの強さかわかるかな？」

「あちらもおそらく上限いっぱいまでレベルを上げてあるだろう。あちらのボスがこの島の通行権利を保持している仕組みだ。君たちがあれを倒してしまえば、大陸から大量のプレイヤーが侵入できるようになり、メインコンピュータが容易にAIに干渉出来るようになってしまう。それを避けるためにも、水の精は倒されないように

してあるはずだ」

「……それでは僕たちは半永久的にこの島から出られないのだが」
「その心配は不要だ。メインコンピュータがAIの保存スペースを破壊したために、AIはこの島のどこかに自身の思考回路を保存するスペースを作りだしたはずだ。しかもAIの保存スペースとなり得るのはNPCのみだから、この島のどこかにいるNPCを倒せば、後はメインコンピュータがどうにかしてあなた方をここから脱出させるだろう」

「しかしそのNPCが絶対に進入不可能な場所にいたらどうするのだね？」

「それはない。そもそも容量節約のためにシステムの構造上進入不可能な場所は自動的に消去されるようになっていて。そんなところに作り上げたNPCだったら、当の昔に消えて無くなっていただろう」

「なるほど。しかしそう簡単に破壊されるような場所にNPCを用意しているとも思えない。レベル七十の化け物を倒すのとどちらが難しいかわからないが。そもそもボス撃墜後に初めて開かれるような場所にNPCを配置すれば、僕たちには手出しできないではないか」

「おそらくその心配も不要だ。そもそも件のAIはマップ開発用のAIではなく、イベント制作用のAIだったから、マップの変更に関する権限はほとんど持ち合わせていない。このマップはほとんど占領される前に出来上がっていた形を残しているから、メインコンピュータは事前にNPCを隠せそうな場所をチェックした。メインコンピュータがあげた候補地はわずか三つ。あなたはその三つさえ回ってくれば、高い確率で問題のNPCを発見できる」

「しかし発見したところで、僕たちプレイヤーはNPCを破壊するなんていう芸当は出来ないのだが」

「それも心配ない。メインコンピュータが、あなた方の何人かに、NPC破壊の特殊技能を付与しておいた。あなたもその一人。都合

上、五百人全員には用意できなかったが、十人以上はこのプログラムを付与されている。ただしNPCとしてメインコンピュータが送り込むことができたのは、船の運搬設定上私一人だけだった。他の人間は誰もこのことを知らない。あなたが指揮を執る必要がある。まず最初は東西南北どちらに行っても構わない。私が助言を与えてしまつと、AIに行き先を予測されやすくなる。あなたの勘に従つて行つた方が、敵の襲撃を受けづらいたろつ。候補地に近づいたときは、その時に私があなたにその旨伝える」

「……なるほど、わかつた。ならば僕の純粋な勘に頼ることにしよう。とくに何の根拠もないが、なんとなく僕は西に行つた方がいい気がするからね」

十一話

「移動、ですか」

柳は突然裕が場所を移動すると言い出したことに驚きを隠せなかった。

「うむ。少しやんごとない事情があつてね。どうしてもここを離れなければならない」

「しかしそんなことをしたら、また離反者が出るんじゃないですか？」

「それは致し方あるまい。我々全員の命に関わることだからね」

「なんでまたそんなことが？」

「ふむ。まあ、君には言つても問題ないだろう。情報伝達能力が著しく低いからね。実はだね。この近辺に、今からおよそ五時間後に、レベル七十のボスが出現して、我々を全滅させようと動き始めるという情報が入つてね」

「胡散臭い話ですね」

「確かに僕も少々疑わしいとは思っているのだが、色々と証拠めいたものを見せられてしまつてね。まあ、それについてはこれ以上聞かないでくれ。僕もまだ頭の整理が就いていないからね」

「で、他のメンバーには伝えたのですか？」

「今から伝えるところだ。まあ、君たち防衛組には、広場で話しても伝わっていかないだろうと思つてね。先に伝えに來ただけさ」

「……そうですか」

慌ただしく去つてゆく裕の背中を眺めながら、柳は今の話をじっくりと考える。

「何を間違つてレベル七十なんてことになるんだ？」

さっぱりわけがわからなかった柳は、すぐに考えることを放棄し、野営地の防衛に意識を集中した。

『正統派』のメンバーの移動が始まったのは、AIが予測したボスの出現時間の、わずか二時間前だった。

「ふう、思いの他、皆を説得するのに手間取ってしまった。まさか君に聞かされた話を一から離す羽目になるとは思わなかった。僕の統率力も落ちたものだ」

裕はため息交じりに喋った。

「問題ない。ここまでは想定内の事態だ。最低でも一時間前に出発すればどうにかなるという予想だった」

NPCの彼（裕が88『はちはち』と命名）は、相も変わらず、無機質な声で裕に話しかける。彼の存在で、今回の状況を飲み込めたプレイヤーが、存外に多かったりする。やろうと思っても、なかなかここまで機械的な話し方はできないからだ。

「しかしこんなにゆっくりな進行ペースで、追いつかれたりはしないのかな？」

「おそらくボスの出現後二時間で追いつかれるだろう。しかし問題ない。危機になれば移動のペースも自然と上がるものだ」

「そんなにいい加減なことでもいいのか」

「問題ない。実のところ、ボスを一度間近で見るにより、全員に危機意識を植え付けた方がよいのだ」

「なるほどね」

そうやって88と喋りながらも、裕は集団に迫った敵モンスターを倒していく。移動に伴う危険は大きいのだ。少しでも油断すれば、低レベルプレイヤーがやられる危険がある。

柳はもつと忙しかった。

「あつ、柳、あっち」

視力がそこそこのいい香苗が、あっちだのこっちだのと、敵モンスターの接近を柳に教えるので、柳は休む間もなく戦う羽目になっていた。

人が急いでる時、時間は疾風のごとく過ぎてゆくものである。

二時間は瞬く間に過ぎてゆき、AIの予想通り、巨大なボスモンスターが出現した。現れた場所は、これもやはり予測通り、裕たちがキャンプを張っていた場所。そこから歩いて二時間の場所にいるにも関わらず、裕たちはボスモンスターの出現にすぐに気がつくことができた。とにかくでかいのだ。このボスモンスターは。

裕たちが最初にこの島に着いた時にも現れた、巨大版泥人形。口あたりに大きく入った亀裂は、今は裕たちを飲み込まんがために開かれているように見える。

「なんか、規格外の大きさだな」

誰かがぼそりと呟いた。確かに、これはボスの平均サイズの十倍は軽くなる。とてもじゃないが、まともに太刀打ちできるようには見えない。

「ねえ、柳。あれと戦ったら、何秒間位生きていられそう？」

「……………60…………いや、240秒位」

柳をして、四分程度しか戦っていないだろうという予想。それもさんざん逃げ回った場合の予測数値である。レベル七十のボスで、あのサイズであれば、強攻撃を一撃でももらえば御陀仏である。念のためということで、裕はマップを開いてボスのレベルと名前を確認した。

ボスのレベルはきっかり七十。名前は土の精。ボスモンスターを示す紫色の文字で書かれている。

「あのリーチでは、あつという間に攻撃範囲に入りそうですね。急ぎましょうか」

裕が全体に号令をかけ、進行速度を一段階あげた。プレイヤーたちの額には、うつすらと冷や汗が浮かんでいた。今までかつて、あそこまで圧倒的な力を持ったボスには対峙したことがなかったのだから、仕方ない。

そのまま歩き続けること、数時間。脚の長さの割には、ボスの移動速度はさして速くなく、裕たちとの距離はむしろ開いていった。

しかし、ボスの体力パラメータはほぼ無尽蔵。対して裕たちは、休息をとらなければならぬ。柳がそんなことを心配し始めたころ、裕が、

「ここから先は、未だ僕たちが一度も足を踏み入っていない場所だ。予想しない罠や敵キャラが出現する可能性がある。気を引き締めていってくれ」

といった。

延々と歩き続けてだれて来ていたメンバーの顔に、緊張が戻ってくる。

そこから先は、それまでほど順調に進むことはできなくなった。

途中で、開かれていないトレジャーボックスがあり、それを開けるか否かで、ひと悶着あったのだ。

「今は予想外の罠にはまるリスクを負うほどの余裕がない。開けるべきではないだろう」

一人のメンバーが主張すると、別のメンバーが、

「しかし我々のアイテムは底をつきかけている。食料だって全然足りていない。ここは多少リスクを冒してでも、アイテムを手に入れるべきだ」

結局、全員が巻き込まれないくらい距離を置いてから、高レベルプレイヤーだけで宝箱を開くことになった。

結局、その宝箱からは、装備アイテムがいくつか出てきただけで、特に罠などはなかったのだが、宝箱からアイテムをとってくる人々を待つ間、無駄に時間を浪費してしまった。ボスとの距離は、マップで確認する限り、二十キロメートルほど。ボスはだいたい、一時間に五キロ近く進んでいる。裕たちが止まってしまっていれば、四時間で追いつかれる距離だ。夜のことを考えると、この倍の距離は稼いでおきたい。

「睡眠は二時間から三時間といったところでしょうか？」

「わっ、妊さん。いきなり背後から話しかけないでくださいよ」

香苗の背後から突如現れた妊。柳はいい加減慣れてきたが、香苗

は素っ頓狂な声をあげて驚いた。

「あまりゆつくり眠れそうにないですね」

妊はまるで人ごとのように、ゆつたりと話しているが、睡眠時間を確保できないのは、非常に危険である。そもそも、夜の移動は、暗闇の中で不意打ちを受ける可能性が高く、非常に危険なのだ。特に、一撃でも致命傷になりかねない低レベルプレイヤーがいる中では、モンスターによる不意打ちは、何としても阻止せねばならない。高レベルプレイヤーが休む時間は、実質ゼロに近いだろう。

「頑張つてね。柳」

香苗は自分は高レベルプレイヤー出ないと言い張り、柳に面倒を押しつける気満々である。しかし、中程度のレベルの香苗でも、ゆつくり休むことはほとんどできないだろう。

「早く標的のNPCが見つかるといいね」

三つあるという候補地の中で、一番最初に行く候補地にその問題のAIがいることを願って、メンバーたちは重い足を引きずりながら、少しでもボスとの距離を稼ごうと足を動かすのであった。

最初の候補地に近づいたことを88が裕に知らせたのは、夜の帳も下りようとしているところだった。

十一話（後書き）

今回こそはミスが無いといいのですが……

十二話（前書き）

更新ペースは落ちてますが、物語は加速してます

十二話

「この近くにあるんだね」

「候補地の一つが現地点よりわずか千七百四十メートル先にある」

「88が裕に、目的地に近付いたことを知らせた頃には、すでに辺りが暗くなっていた。」

この時、件のボスとの距離は、およそ三十キロ。これでもかなり無理をして稼いだ距離である。

「正確には、どちらの方に？」

「北から28・57684度東に向いた方角に、目的地の中心地が存在する。申し訳ないがこれ以上正確な値は出せそうにない」

「すまない。言い方が悪かった。ようは北東だね」

「おおざっぱに言えばそうなる」

「多少進行方向とはずれるね。でも島の端の位置を考えれば、そろそろ曲がらないと危険かな？」

「島の端に至るまでには、残り十五キロある」

「まあ、少し内側で曲がつかないと、追い詰められたらまずいしね。よし。北東に針路をとろう」

そうして、裕たち一行は進路を北東に変え、最初の目的地へと向かった。

「目的地は洞窟のダンジョン。当初は進入条件に二匹のボスのどちらかの討伐が含まれていたが、AIに占領されたときにメインサーバーが無理やり進入条件を無効化したから、今のあなた方でも入ることができるはず。しかしダンジョン内はフィールドよりもやや高めのレベル設定が可能だから、全員で行くのは危険だろう。一部の高レベルプレイヤーだけで進入するのがベストだと予測される」

「そうだね。このままでは確実にボスに追いつかれる。二手に分か

れよう。ところで、NPCを発見したら、どうやって破壊すればいいんだ？」

「通常の戦闘と同様。NPCに耐久力の概念はないから、破壊属性を持った強攻撃を一撃でも当てれば撃破できるだろう。ただ、もし件のNPCが本当にここにいた場合、あなた方の接近はすでに気づかれているだろう。その場合、NPCが最後のあがきとして、それなりの戦闘能力を持っている可能性が高い。NPCの攻撃にダメージ判定は存在しないが、上手く逃げられると厄介だ。確実に仕留めなければならぬ」

「僕のほかに、NPCを破壊できるように設定されているのは？」

「レベルが三十五を超えているプレイヤー全員が可能だ。あなたは例外的にやや低めでも能力を付加されている」

「そうか……、よし、柳君たちに頑張ってもらうことにしよう。僕はこちらの指揮を取った方がいいだろうからね。他に決めておかなければいけないことはあるかな？」

柳の元を裕が訪れたとき、なんとなく柳は嫌な予感がした。なぜなら、裕が明らかに何かよからぬことを企んでいる顔をしていたからだ。

「……なんですか」

何か言われる前に、柳から聞いた。

「実は、柳君、君に少々頑張ってもらいたいことがあってね」

「……辞退していいですか」

「駄目だね。頑張ってくれ。強制だ」

「で？」

「ここから百メートルほど前方にある洞窟、そこに進入して、洞窟のどこかにいるNPC……、いや、いないかもしれないのだが、もしいたならそれを破壊してもらいたい。おそらくNPCの移動可能範囲は十メートル四方の範囲内だけだから、全ての部屋をマップン

グしてそれで見つからなければ、いないと思っていいだろう」

「どうやってNPCを破壊するんですか」

「普通に強攻撃を当てさえすればいい。ただし、一度NPCのイベント発生最長距離、同一の部屋内で十メートル以内に近づいた場合、イベントを利用してNPCが脱出する可能性がある。逃がさないように、必ず出口はマークしてくれ。NPCの攻撃はダメージ判定が出ない。心配はいらない。それから、行動一時停止イベントも無効化することができるらしいから大丈夫だ」

「……わかりました」

「と、さすがに君一人というわけにもいかないからね。他にここにいるメンバーから適当に二人ほど抜粋して連れて行ってくれ。出来れば中レベル帯のプレイヤーを引き取ってくれるとありがたいな。多分僕たちの方でボスを引きつけることになるから、僕らの移動速度をこれ以上落とすわけにはいかない」

「ダンジョンの難易度は？」

「レベル三十五以上推奨クラスのダンジョンだろうというのが88の予想だ」

「その中に中レベクラスを連れて行けと？」

「大丈夫、柳君ならきつといけるさ」

「根拠のない励ましは逆効果ですよ」

「まあ、とにかく、そういうわけだから、よろしく頼むよ。ちなみにNPCは君しか破壊できないようになっていいるから、間違ってもしんでくれるなよ」

「言われずとも」

そう言って、裕は颯爽と去って行った。

「なんていう無茶な作戦……」

柳はダンジョンの難易度と自分のレベルを照らし合わせて、生存率を推し量った。

中レベル帯のプレイヤーといえ、この世界では一般に二十から三十レベルのプレイヤーを指す。ギリギリ三十レベルの仲間を連れ

で行ったところで、三十五レベル以上推奨のダンジョンでは、大した火力にならない。となれば、筋力パラメーターのあまり関係のない、補助系統のプレイヤーを連れて、柳が一人前衛として戦うのが上策だろう。そうすれば、単純なクリアだけなら、九割方無事に行けるだろう。しかし逆にいえば、一割の確率で死者が出る。一発勝負のこの世界での九割とは、かなり低い数字といってよい。

「なぜマスターはこんな無謀な作戦を立てた……？」

柳は突然の不条理な命令に疑問を抱きつつも、仕方ないからやるかと自分を奮い立たせて、重大な問題に気がついた。柳にとってはダンジョンの難易度よりもある意味重大な問題である。

つい失念していたが、柳は自分で二人味方を集めなければいけないのだ。しかも死の危険と隣り合わせの危険な任務に。

もちろん、マスターのお墨付きという点では、人員確保自体は可能だ。しかし、柳には致命的な問題なのだ。

——つまり、人脈が無い——

トップクラスと十分言える柳のパラメーターだが、人付き合いのパラメーターはレベル0、いや、もっとひどいではなからうか……

などとわけのわからない思考に陥り始めたところで、救いの手が差し伸べられた。

「柳ー、顔が暗いぞ」

救世主

香苗の登場により、メンバー一人目は半ば確定した。

しかも幸運なことに、すでに香苗には裕から話が通されていた。

そして香苗は自分から参加しに来てくれたのである。十中八九、裕の謀略だろうが。

されに幸運は続いた。

「安心してください。私も参加しますから」

なぜか柳が指名する前に勝手に参加が決まっていた？ 妊が現れたので、柳は自分からメンバー集めに苦労する必要は無くなった。

「では、行きましょうか」

ほとんど何もしゃべらない柳に代わって、妊が二人を連れて歩き

だす。

柳は妊がリーダーでいいんじゃないかと思いつつ、巨人から逃げて長い長い道のりを歩き続けるプレイヤーたちの列から抜け出し、暗闇に包まれていく洞窟を目指して歩き始めた。

柳たちが洞窟に向かったのを確認し、一度休憩をとろうとメンバーの行進を止め、適当な場所に休ませる。

その隣には、８８が、相変わらずの無表情で立ち続けている。

「無事にことが運ぶといいのだが……、と、僕たちも彼らの心配をしている余裕はなさそうだね。何としても、無事に大陸に戻りたいものだ。なあ、大和」

「そうだな」

「彼らだけに面倒事をやらせるわけにはいかない。僕たちも一気にことを運ぶよ」

「……どうするつもりだ？」

「僕らは……、さらに二手に分かれて、一気に残りの二か所を制圧する。片方は……頼んだよ」

「……解った」

「よし、ではまたどこかで落ち合おう。それまで無事で」

再び動き出した裕たちの隊は、夜闇の中、その列を二分させた。海よりやってきた異邦者達は、広い島にその足跡を広げていく……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0548j/>

電腦の生死

2010年10月8日21時09分発行